陸前高田市文化財報告第12集

中沢浜貝塚発掘調査概報Ⅳ

1988年3月

陸前高田市教育委員会

発刊にあたり

史跡中沢浜貝塚は、昭和９年１月22日文部省告示第16号によって国指定を受けた保護遺跡であります。

陸前高田市では、この貝塚の保存管理計画を策定するため、遺構の所在や分布範囲を確認することを目的として、昭和59年度から５ケ年計画で継続的に発掘調査を実施してきました。本年度で第４年次調査を迎えました。

第１～３年次調査結果からは、縄文時代から平安時代に亘る複合遺跡であることが知られ、ことに貝塚は縄文前期中葉～晩期中葉にかけて連続して営まれたことが明らかにされています。これらの成果は、貝塚規模からみれば当時の人々の生活跡の極く一部にすぎませんが、当貝塚の今後の保存管理を進めるうえで、貴重な成果といえます。

本年度調査では、予想外にも縄文時代の墓域が発掘され、また新たに土坑などの遺構や貝層が検出されています。

本書は、本年度調査結果をまとめ昭和62年度第４年次中沢浜貝塚発掘調査概報として発刊するものでありますが、本書が学術研究の分野、また文化財保護思想の普及にも活用されることを願う次第です。

本調査に際しましては、常にご指導をいただいている文化庁、岩手県教育委員会をはじめ、ご協力をいただいた土地所有者、耕作者そして作業に従事して下さった方々、また学問的見地からご教示をいただいた諸研究機関並びに関係者各位に対し深く感謝申し上げます。

昭和63年３月31日

陸前高田市教育委員会
教育長　大　澤　太　郎

例　　言

1. 本書は岩手県陸前高田市広田町に所在する国指定史跡中沢浜貝塚の第4年次発掘調査結果の概要を収録したものである。また、本書では鑑定結果も収録している。
2. 調査は、本貝塚の保存管理計画策定の資料を得るため、その内容確認のための発掘調査であり、5ケ年継続事業として行われているものである。調査費は国庫および県費補助を受け、本年度は200万円である。
3. 発掘調査面積は約54㎡（4地点）であり、検出した遺構等は次のとおりである。

   縄文時代埋葬遺構　8基　　土坑　2基　　貝層　2ケ所　　遺物包含層
4. 調査主体は陸前高田市教育委員会（教育長　大澤太郎）で、野外調査及び室内整理作業は、佐藤・蒲生が担当した。
5. 調査結果の中から、次の事項について次の方へ鑑定を依頼した。

   中沢浜貝塚出土の縄文時代人骨　　百々幸雄（札幌医科大学教授）
6. 野外調査及び整理報告に当り、次の方々より御教示・御指導をいただいた。（敬称略）

   国立歴史民俗博物館　西本豊弘、岩手県立広田水産高等学校　遠藤勝博

   岩手県教育委員会文化課　相原康二・佐々木勝・森岡陽一

   岩手県立博物館　熊谷常正、大船渡市立博物館　金野良一、東北学院大学学生　熊谷賢
7. 土色は「新版標準土色帖）「小山・竹原、1973）に従った。
8. 写真図版の縮尺は不定である。
9. 本書で未報告の出土資料については、昭和63年度最終年次発掘調査終了後に刊行予定の本報告書に収録予定である。
10. 本書の執筆・編集は蒲生が担当し、佐藤が補佐した。

目　　次

序

例　言

Ⅰ　遺跡の概要……3

Ⅱ　調査の経過……3

Ⅲ　第４年次調査の概要……4

1.　調査の目的と方法……4

2.　調査体制……4

Ⅳ　基本層序……6

Ⅴ　検出された遺構……6

1.　Bh24区……7

1）Bh24土坑－1……7

2）Bh24土坑－2……11

3）Bh24区貝層……11

2.　Ce27区……11

1）Ce27埋甕－1……14

2）Ce27埋甕－2……14

3）Ce27埋甕－3……15

4）Ce27埋甕－4……15

5）Ce27埋甕－5……15

6）Ce27－1号人骨……15

7）Ce27区貝層……19

3.　Da27区……20

1）Da27－1号人骨……20

4.　Da34区……20

Ⅵ　動物遺存体……21

貝　類……22

魚類、爬虫類……22

哺乳類……22

動物遺存体種名一覧表……22

Ⅶ　まとめ……24

付　編　目　次

付編　中沢浜貝塚出土の縄文時代人骨　―昭和62年度発掘資料―　……26

図　版　目　次

第１図　遺跡の位置図……1

第２図　第４年次発掘調査区設定図……2

第３図　遺構配置図……5

第４図　Bh24区土坑……8

第５図　Bh24区貝層……8

第６図　Bh24区西壁……9

第７図　Bh24区土坑（平・断面）……10

第８図　Ce27区埋葬遺構……12

第９図　Ce27区貝層……12

第10図　Ce27区南壁……13

第11図　Ce27区埋甕（断面）……16

第12図　土器実測図……17

第13図　Ce27－1号人骨……18

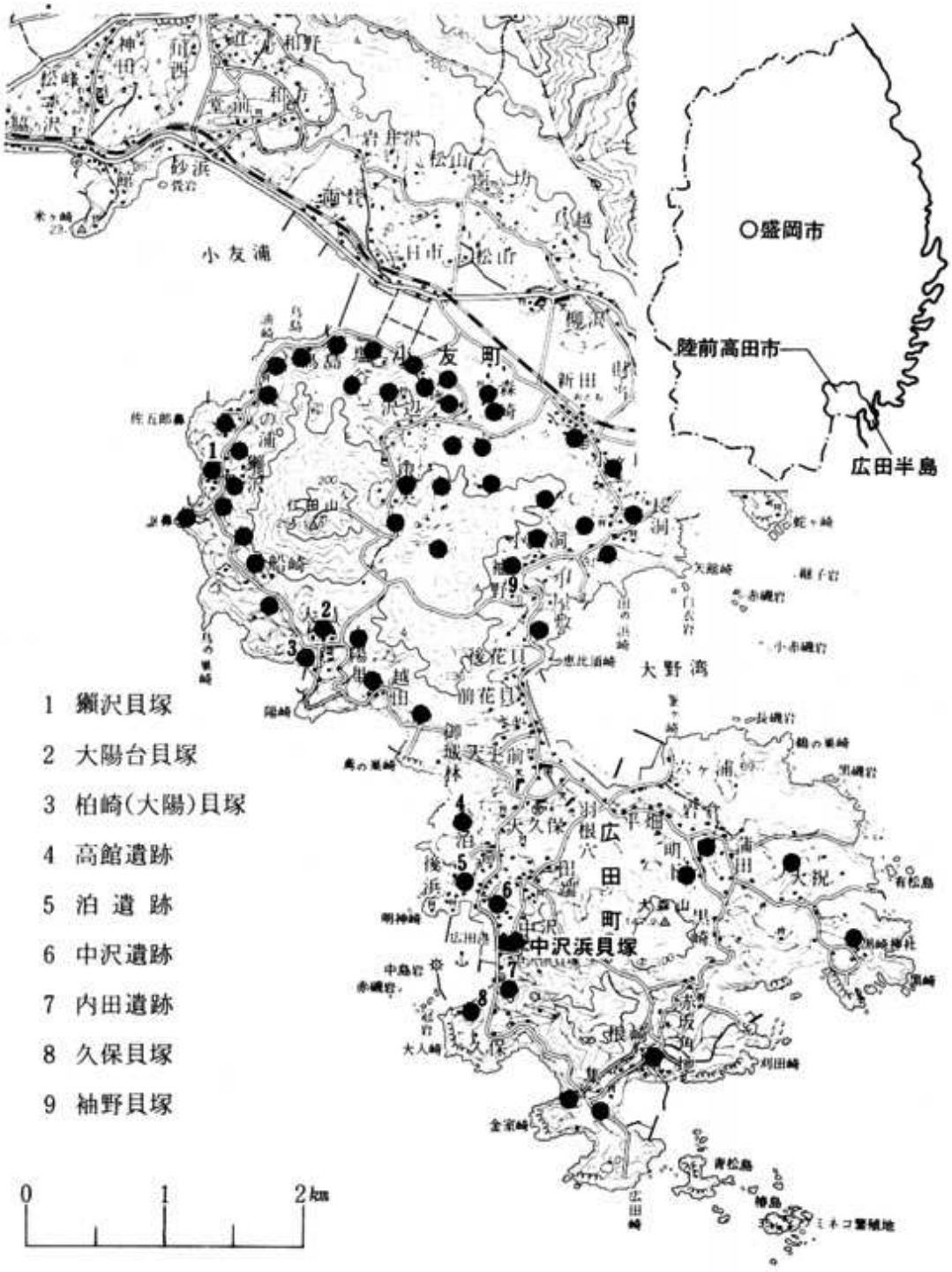
第14図　Da27区西壁……19

第15図　Da27－1号人骨……20

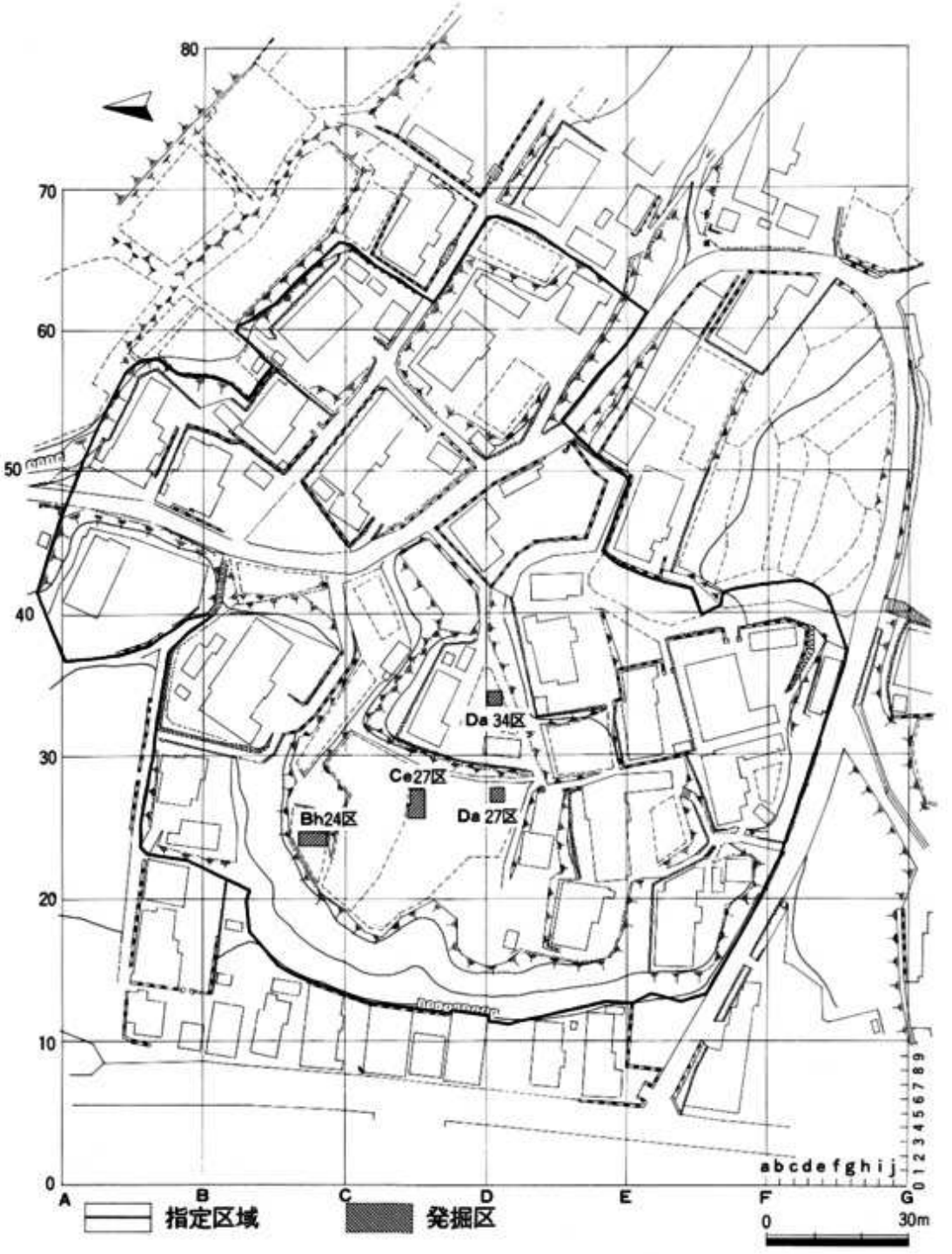
第16図　Da34区東壁……21

写真図版目次

PL－1　空中写真……31
PL－2　調査区風景（北端部Bh24区）……32
PL－3　調査区風景（中央部Ce27区）……32
PL－4　調査区風景（南端部）……32
　a　西区（Da27区）
　b　東区（Da34区）
PL－5　北端部基本層序……33
PL－6　中央部基本層序……33
PL－7　南端部西区基本層序……33
PL－8　南端部東区基本層序……34
PL－9　Bh24区土坑……34
PL－10　Bh24区貝層……34
PL－11　Bh24土坑－1埋土……35
PL－12　Bh24土坑－2埋土……35
PL－13　Bh24区貝層伴出遺物……35
PL－14　Ce27埋甕－1、2、3（平面）……36
PL－15　Ce27埋甕－4（平面）……36
PL－16　Ce27埋甕－1、2（断面）……36
PL－17　Ce27埋甕－3（断面）……37
PL－18　Ce27埋甕－4……37
PL－19　Ce27埋甕－5……37
PL－20　Ce27－1号人骨……38
PL－21　Ce27区貝層……38
PL－22　Ce27区貝層伴出遺物……39
　a　遺物（骨針）
　b　遺物（土器）
PL－23　Ce27－2、3号人骨……39
PL－24　Da27－1号人骨……40
PL－25　Da34区遺物包含層……40
　a　遺物検出状況
　b　遺物（石鏃）
　c　遺物（土器）
　d　動物遺存体（イノシシ下顎骨）
PL－26　Ce27埋甕－1……41
PL－27　Ce27埋甕－2……41
PL－28　Ce27埋甕－3……42
PL－29　Ce27埋甕－4……42
PL－30　Ce27埋甕－5……43


○盛岡市
陸前高田市
広田半島
小友浦
小友町
大野湾
広田町
中沢浜貝塚
1 獺沢貝塚
2 大陽台貝塚
3 柏崎(大陽)貝塚
4 高館遺跡
5 泊 遺 跡
6 中沢遺跡
7 内田遺跡
8 久保貝塚
9 袖野貝塚
0
1
2km

第1図　遺跡の位置図



第2図　第4年次発掘調査区設定図

Ⅰ、遺跡の概要

史跡中沢浜貝塚は、岩手県陸前高田市広田町字中沢に所在する。（第１図、ＰＬ－１）

この貝塚は、北上山地の東縁に発達したリアス式海岸の海湾に臨む丘陵上及び斜面に分布する貝塚のひとつである。岩手県沿岸地方の最南端、広田湾に臨む半島南端に位置し、標高25m、低地との比高が20ｍ程の西に傾斜する丘陵先端部上に立地する。縄文時代・弥生時代・平安時代の複合遺跡であるが、中心は縄文時代である。主に鹹水産貝類によって構成され、各時期の土器をはじめ、各種骨角器、魚・獣骨などが出土している。また埋葬人骨が出土している。

広田半島における貝塚の分布は、中沢浜貝塚のほか古くから大陽台貝塚、獺沢貝塚などが知られ、発掘調査も行われている。

Ⅱ、調査の経過

中沢浜貝塚は、昭和９年１月史跡名勝、天然記念物保存法により著名な貝塚として国指定を受けた保護遺跡である。昭和35年チリ地震津波以降、史跡内の宅地化が進み、近年指定面積12,241㎡の内約７割が個人宅地で占められるに至っている。

発掘調査は、遺跡の現状から史跡内の保存管理計画を策定するための遺構の実態等を把握することを目的として、文化庁及び岩手県教育委員会の指導により、昭和59年度から５ケ年計画で行っている継続調査である。今回の調査は、その第４年次調査である。

第１年次調査：昭和59年度に行われた第１年次調査は、貝塚の東斜面北縁Ａ区、南斜面南端Ｂ区の２ケ所を調査し、Ａ区では縄文前期末葉～中期末葉の149層に及ぶ貝層、土層、Ｂ区では新生児骨埋葬の甕棺２個体、埋葬犬３体のほか、晩期中葉の混貝土層を検出した。

第２年次調査：貝塚の東斜面を中心に18ケ所設定し、第１年次調査Ａ区に隣接する４ケ所で貝層の拡がりを確認した。そのほか焼土の拡がり及び配石、またピットと思われる遺構の輪郭が検出されたが、完掘していないため詳細は不明である。

第３年次調査：貝塚の南斜面東側を中心に８ケ所設定した。主に縄文前期中葉～晩期中葉の貝層の拡がりを確認したほか、弥生時代に属する遺物包含層を検出した。

発掘調査面積は、第１年次調査が約145㎡、第２年次約107㎡、第３年次約64㎡の合計316㎡である。調査の成果については、既刊の「中沢浜貝塚発掘調査概報Ⅰ」、「同Ⅱ」、「同Ⅲ」で略述している。

Ⅲ、第４年次調査の概要

1. 調査の目的と方法

第４年次調査の目的は、第１年次～第３年次調査の結果をもとに、未調査区域の貝層の分布の有無など分布範囲をさらに明確にとらえること、また遺構の所在についても、可能なかぎり明らかにすることとした。

今回の調査は、貝塚の北西区域にあたる丘陵頂部を対象として実施した。現状はほぼ東半が宅地であるが、丘陵先端部西半は雑種地で比較的平担な旧地形を呈する。丘陵下は宅地である。標高は約17ｍ～21ｍである。調査区は４ケ所設定し、調査面積は約54㎡である。

調査の方法は、第２、第３年次調査に準じて行い、発掘区はほぼ磁北方向に設け、規模は３×３ｍないし３×６ｍグリッドとした。発掘区の呼称は、調査区設定図（第２図）の30ｍ大区画、３ｍ小区画を用いて、南北方向のアルファベッドと東西方向の数字の組合わせで表わした。本調査では、平担部分の北端部をBh24区とし、中央部をCe27区、南端部の西側はDa27区、東側はDa34区と呼称している。

遺構の検出にあたっては、調査区が狭少なことや雨天候による壁崩壊に伴っての土砂撤去作業に時間を費やしたため、遺構の一部を記録したのみで規模や性格など十分把握されないまま埋戻しを行っている。

野外調査は、昭和62年７月１日に始まり昭和62年10月21日で終了した。

2. 調査体制

調査は初年度より陸前高田市教育委員会（教育長　大澤太郎）が主体となり、本年度の発掘調査体制は次のとおりである。

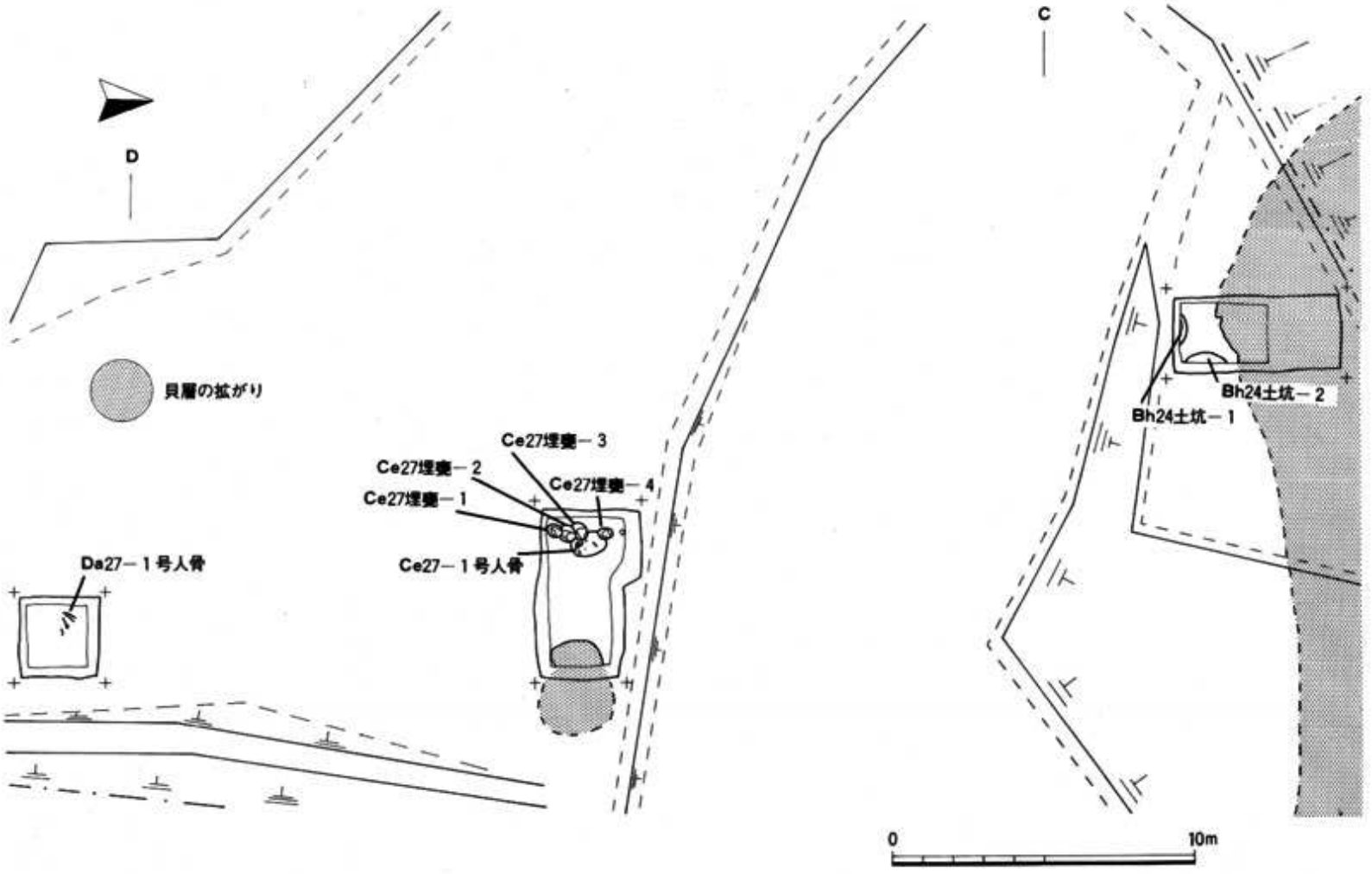
調査総括	菅原昭雄	陸前高田市教育委員会社会教育課長	
事務担当	佐々木徹朗	〃	社会教育課長補佐
調査員	本多文人	〃	指導主事
	佐藤正彦	陸前高田市立博物館学芸員	
	蒲生琢磨	陸前高田市教育委員会社会教育主事	

調査の実施にあたっては、次の方々からご協力をいただいた。（敬称略）

野外調査　長野敦子、村上恵子、戸羽昭子、藤井加代子

整理作業　金君子、荻原幸子、水野平子、小泉しげ子、菅野仁子

地権者及び資材倉庫借用　藤井喜八郎（中沢浜公民館長）、吉田三人、小野寺高雄


D
C
貝層の拡がり
Ce27埋甕－3
Ce27埋甕－2
Ce27埋甕－4
Ce27埋甕－1
Ce27－1号人骨
Da27－1号人骨
Bh24土坑－2
Bh24土坑－1
0
10m

第3図　遺構配置図

Ⅳ、基本層序

Bh24区、Ce27区、Da27区、Da34区の各地点の土層堆積状況は、それぞれ層相を異にするため層位的な関係は明確に把握されていないが、大別すると次の８層に区分可能である。

Ⅰ層　表土及び耕作土である。

Ⅱ層上層　黒褐色～黒色砂質シルトを基本土とする。主として縄文晩期中葉頃の遺物を包含する。層厚は約30cm前後でほぼ均一に堆積する。Ce 27区では、細分層３層下部から埋甕口縁部が検出される。

Ⅱ層下層　にぶい黄橙色～灰黄褐色砂と暗褐色～黒褐色砂質シルトが互層する層である。主に縄文後期末葉の遺物を包含する。Ce27区に顕著にみられ、15層に細分される。細分層の９、10層は混貝土層である。また５層上部、11層下部で基坑と思われる輪郭がみられるが、履土と堆積層の色調の区別がつきにくい砂層のため明確ではなく、墓坑上端部は把握できなかった。

Ⅲ層　暗褐色～褐色シルトを基本土とする。Ce27区ではほぼ平担な堆積を示し、本層上部からは主に縄文中期末葉に属する大木10式期の土器が出土している。

Ⅳ層上層　黒褐色～褐色シルトを基本土とする。Bh24区にみられ、北方向に傾斜する。貝層の上層をなす。主に縄文前期末葉～中期前葉に属する大木５～７式期の土器が出土しているが、層位的に細分されるまで把握されていない。細分層８層下部で土坑の輪郭がみられる。

Ⅳ層中層　魚・獣骨層、混貝土層、純貝層などの重複層である。Bh24区にみられる。北に傾斜する本層上端部を検出している。貝層からは、縄文前期中葉に属する大木４式期の土器が伴出する。

Ⅳ層下層　にぶい黄褐色～黒褐色シルトを基本土とする。Bh24区にみられ、貝層の下層をなす。縄文前期前葉頃と推定される遺物包含層である。

Ⅴ層　基盤で花崗岩風化土壌（マサ土）である。Da27区を除く３地点で本層に達する。

Ⅴ、検出された遺構

調査の結果、遺構は、縄文時代の埋葬遺構８基、土坑２基である。貝層は２ケ所である。そのほか遺物包含層がある。なお、第３図に示した貝層の拡がりは、今回の発掘調査の成果及び比較的密度の濃い破砕貝などの地表散布状況の観察から推定している。

出土遺物は、主として縄文前期前葉～晩期中葉にかけての土器をはじめ、石器、骨角器、土

製品、動物遺存体が出土している。また人骨は4体出土している。

出土土器は、60×38×20cmのコンテナで約6箱程得られている。その中から6個体が現時点で復原されている。

石器は約55点出土した。石鏃のほか打製・磨製石斧、石製円盤、石剣、凹石などがある。

土製品は、土製円盤7点のほか耳飾り製品1点のみ出土している。

骨角器は約18点出土した。鹿角製の釣針が主であるが、完形品は少ない。そのほかヘラ状角・骨製品、骨針、弓筈形角器などが出土している。

ほかには軽石、フン石、フレークなどが出土している。また墓標石と推定される径30cm前後の礫も出土している。

動物遺存体は、哺乳類ではイノシシ、シカ、クジラ、イルカなど、爬虫類ではカメなどが出土している。魚類ではマダイ、マイワシ、アイナメ、カサゴ科の一種が多く、ほかにマアジ、マグロ、サメ類などがみられる。

貝層を構成する貝類は、殻頂部を欠損した破砕貝のため主体貝種は明確ではないが、ムラサキインコガイ、イガイ、チリハギガイが他種に比して多くみられる。ほかにはアサリ、チヂミボラなどの完存貝も出土している。また当時の食糧にはなり得ないオカモノアラガイ、オカチョウジガイなどの陸貝も貝層サンプル資料中に含まれている。

つぎに各発掘区の調査の成果について略述する。便宜上、貝塚西側からBh24区、Ce27区、Da27区、Da34区の順に述べる。なお、本稿では、主に遺構及び貝層の拡がりなどについて述べ、出土遺物の詳細な報告については、最終年次調査が終了する昭和63年度に刊行予定の本報告書で記述することとしたい。動物遺存体については、若干の補足説明と種名一覧表を作成した。

また、調査結果の中から、「中沢浜貝塚出土の縄文時代人骨」として、札幌医科大学解剖学教室教授百々幸雄氏より玉稿をいただき、本書に収録できたことをここに記して感謝申し上げる次第である。

1. Bh24区

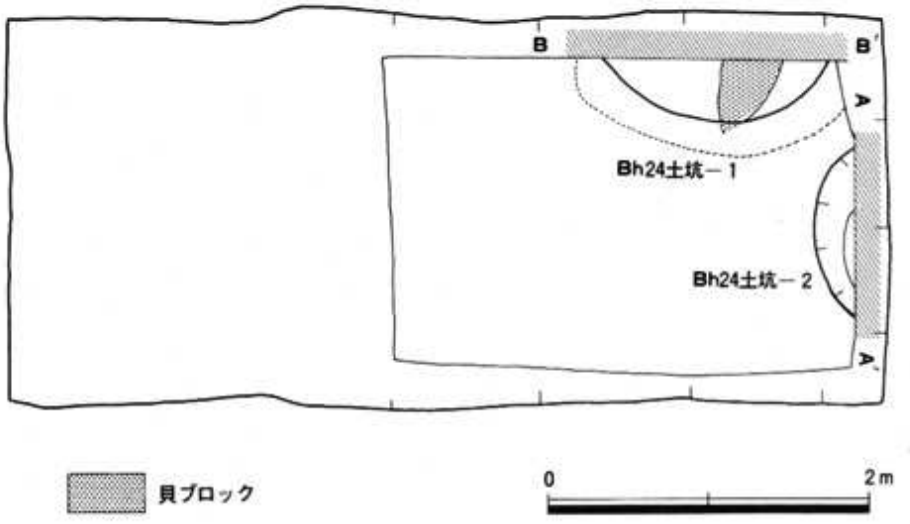
陸前高田市広田町字中沢220－1　吉田タツヨ氏所有雑種地

該区は、丘陵頂部の北端部にあたる。(PL－2) 発掘区は3×6mグリッドを設定し、主に南側を堀り下げた。標高約16mである。堆積層は20層に細分され北に傾斜する。(第6図 PL－5)

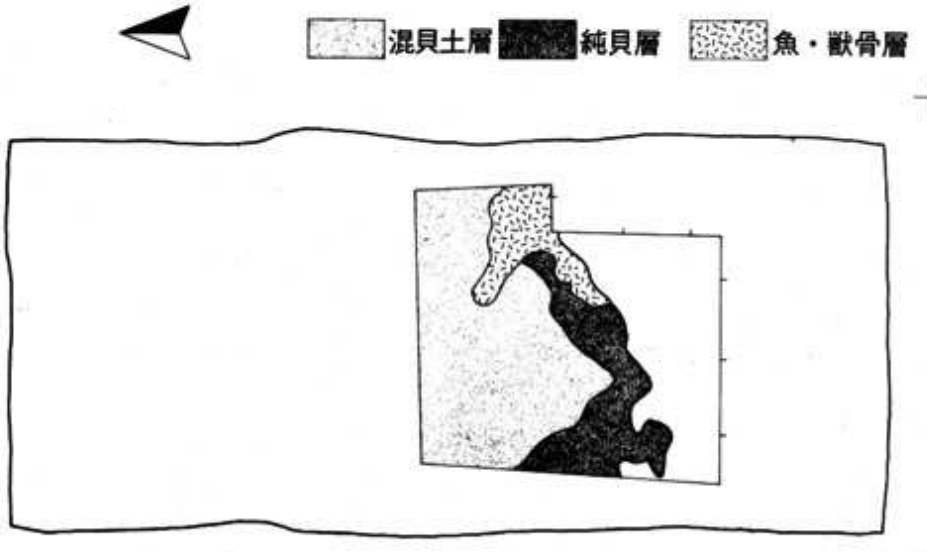
検出した遺構は土坑2基で、一部である。また貝層の分布も確認した。(第4、5図)

1) Bh24土抗－1

＜遺　構＞(第7図a、PL－9、11)

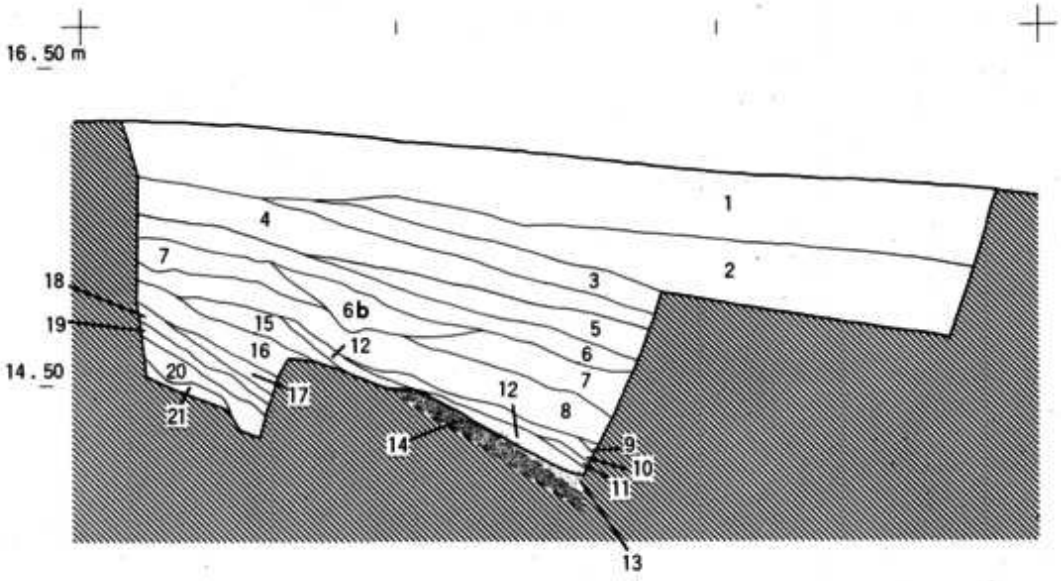


第４図　Bh24区土坑



第５図　Bh24区貝層

発掘区の南壁寄りに位置する。８層黒褐色シルト層下部に遺構の輪郭が認められる。８層は、上・下層に細分可能と思われるが、にぶい黄褐色ブロックを不整に含むため判然としていない。また遺構の大半は南壁に遺存する。検出時の規模は、開口部径 110 cm、深さ80cm、底部径50cmを測る。土坑底部は地山直上まで達し、断面形はほぼピーカー形で、底面は比較的平坦である。



大別層	層位	層名	土質	土色		備考
	1	土層	砂			耕作土
	2	土層	砂	10YR7/2	にぶい黄橙色	
	3	土層	砂	10YR5/4	にぶい黄褐色	
	4	土層	砂	10YR5/2	灰黄褐色	
	5	土層	砂	10YR5/4	にぶい黄橙色	
	6	土層	砂質シルト	7.5YR3/2	黒褐色	
	6b	(撹乱?)				
Ⅱ上?	7	土層	砂質シルト	7.5YR3/1	黒色	径4cm前後の礫含む。土器片少量。
Ⅳ上	8	土層	シルト	10YR3/2	黒褐色	10YR5/4にぶい黄褐色をブロック状に含む。下部遺構検出面。
	9	土層	シルト	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘性強・しまる・径6cm前後の礫含む。
	10	土層	シルト	7.5YR5/6	褐色	粘性強・しまる・カーボン含む。
Ⅳ中	11	魚・獣骨層	シルト	7.5YR5/4+3/3	褐色+極暗褐色	
	12	土層	シルト	7.5YR3/3	極暗褐色	粘性有り・しまる・貝層直上層・腐植痕含む。
	13	混貝土層	シルト	10YR3/3	暗褐色	イガイ、ムラサキインコガイが主体
	14	純貝層				イガイが多い・アサリなどの完存貝もみられる。
Ⅳ下	15	土層	シルト	10YR5/3	にぶい黄褐色	硬くしまる・径6cm前後の礫・カーボン微量含む。
	16	土層	シルト	10YR3/3	暗褐色	硬くしまる・カーボン少量含む。
	17	土層	シルト	10YR3/3	暗褐色	10YR6/6明黄褐色をブロック状に含む。
	18	土層	シルト	10YR3/3	黒褐色	硬くしまる・カーボン微量含む。
	19	土層	シルト	10YR3/3	暗褐色	粘性強・やわらかい・カーボン少量含む。
	20	土層	シルト	10YR3/4	暗褐色	しまる・径16cm前後の礫・カーボン微量含む。
Ⅴ	21	基盤	花崗岩風化土	10YR5/6	黄褐色	地山

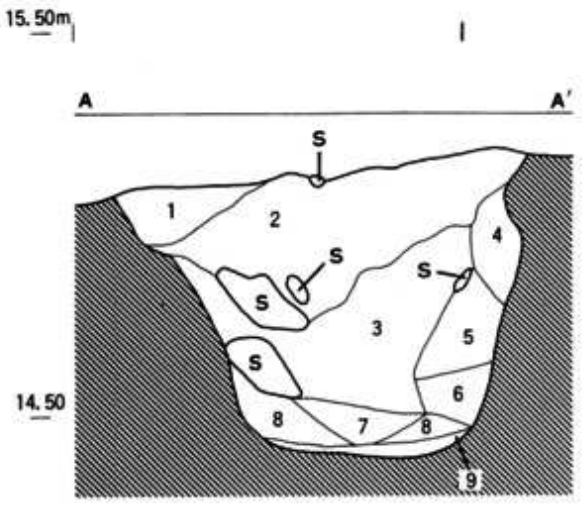
第6図　Bh24区西壁

埋土は、にぶい黄褐色～黒褐色シルトが混入する。径30cm前後の礫を含む。埋土上部は硬くしまっている。

＜遺物と時期＞

埋土の底部直上以外から土器細片2点が得られているのみで、時期は明確ではない。

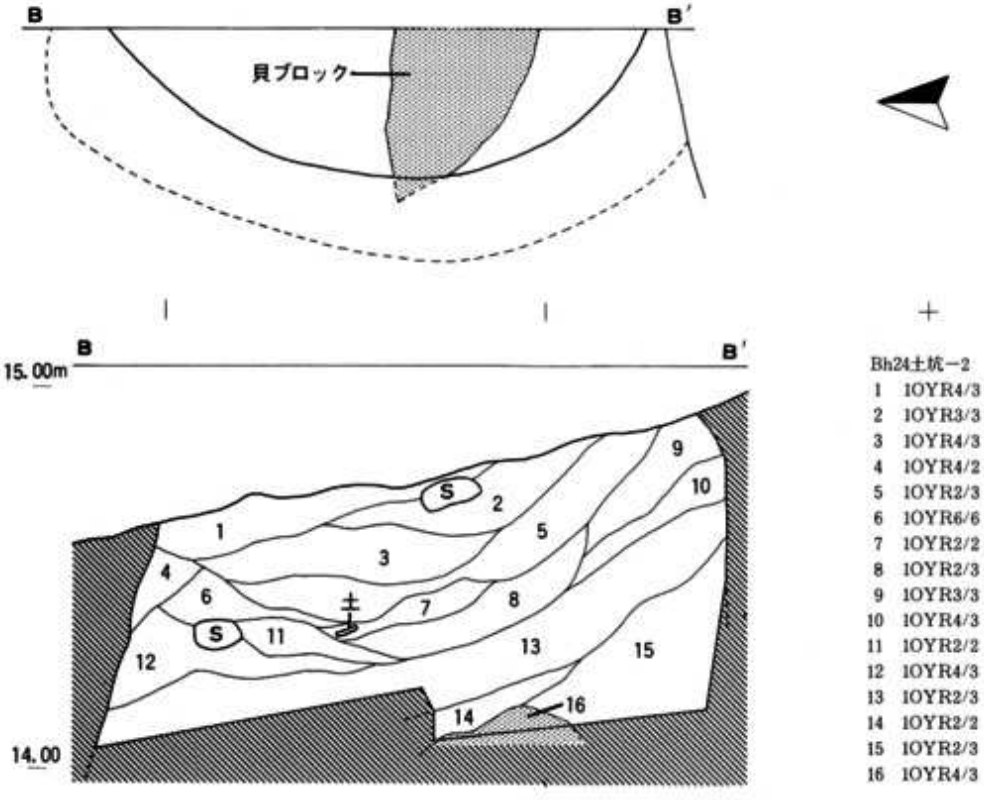
a、Bh24土坑－1



Bh土坑－1

1	1OYR3/3	暗褐色
2	1OYR4/3	にぶい黄褐色
3	1OYR3/3	暗褐色
4	1OYR2/3	黒褐色
5	1OYR3/3	暗褐色
6	1OYR4/2	灰黄褐色　1OYR6/6 明黄褐色ブロック含む
7	1OYR3/2	黒褐色
8	1OYR4/2	灰黄褐色　1OYR6/6 明黄褐色ブロック含む
9	1OYR2/2	黒褐色

b、Bh24土坑－2



Bh24土坑－2

1	1OYR4/3	にぶい黄褐色
2	1OYR3/3	暗褐色
3	1OYR4/3	にぶい黄褐色
4	1OYR4/2	灰黄褐色
5	1OYR2/3	黒褐色
6	1OYR6/6	明黄褐色
7	1OYR2/2	黒褐色
8	1OYR2/3	黒褐色
9	1OYR3/3	暗褐色
10	1OYR4/3	にぶい黄褐色
11	1OYR2/2	黒褐色
12	1OYR4/3	にぶい黄褐色
13	1OYR2/3	黒褐色
14	1OYR2/2	黒褐色
15	1OYR2/3	黒褐色
16	1OYR4/3	にぶい黄褐色 貝ブロック含む

第７図　Bh24区土坑（平、断面）

2）Bh24土抗－2

＜遺　構＞（第7図b、PL－9、12）

発掘区の東南壁寄りに位置する。Bh24土坑-1と同じく8層下部で遺構の輪郭を検出した。平面形は円形に近いものと推定されるが、大半は東壁に遺存しているため明確ではない。底部は、地山を深く掘り込んでおり未掘である。また一部は南壁にも遺存する。検出時の開口部径は約140㎝を測る。深さは発掘底面より検土杖で約50㎝を測る。断面形はフラスコ状を呈するものと推定される。埋土は、にぶい黄褐色～黒褐色シルトで構成される。貝ブロック、小ブロック状の炭化物、径約20㎝程の礫を含む。埋土上部は硬くしまっているが、下部は柔らかく粘性がある。

＜遺物と時期＞

時期不明の土器細片8点が出土している。また貝ブロックに伴ってマイワシ、カツオ、カサゴ科の一種などの魚骨が出土している。貝種は、殻頂部を欠いた破砕貝のため不明である。

3）Bh24区貝層

＜分　布＞（第5図、PL－10）

発掘区の南寄りで貝層の上端部を検出した。分布は、東西約166㎝、南北35～159㎝の範囲で確認した。北に傾斜し、保存状態は良好である。貝層には、純貝層、混貝土層がある。また、魚・獣骨層を伴い、数枚に重複して形成されている。魚・獣骨層が分布する東壁寄りの上端部は、Bh24土坑－2に一部切られる。

＜遺物と時期＞（PL－13）

貝層伴出遺物として、器表に山形貼付文を施文する大木4式期の土器片が出土しており、貝層形成期は、縄文前期中葉頃と考えられる。そのほか釣針などの骨角器が出土している。

純貝層、混貝土層を構成する主体貝種は、大半が同定部位を欠いた破砕貝であるが、前者はイガイが多いのに比して、後者はムラサキインコガイ、イガイ主体である。また完存貝種として、純貝層からアサリ、チヂミボラなどが出土している。そのほか陸貝も含まれている。

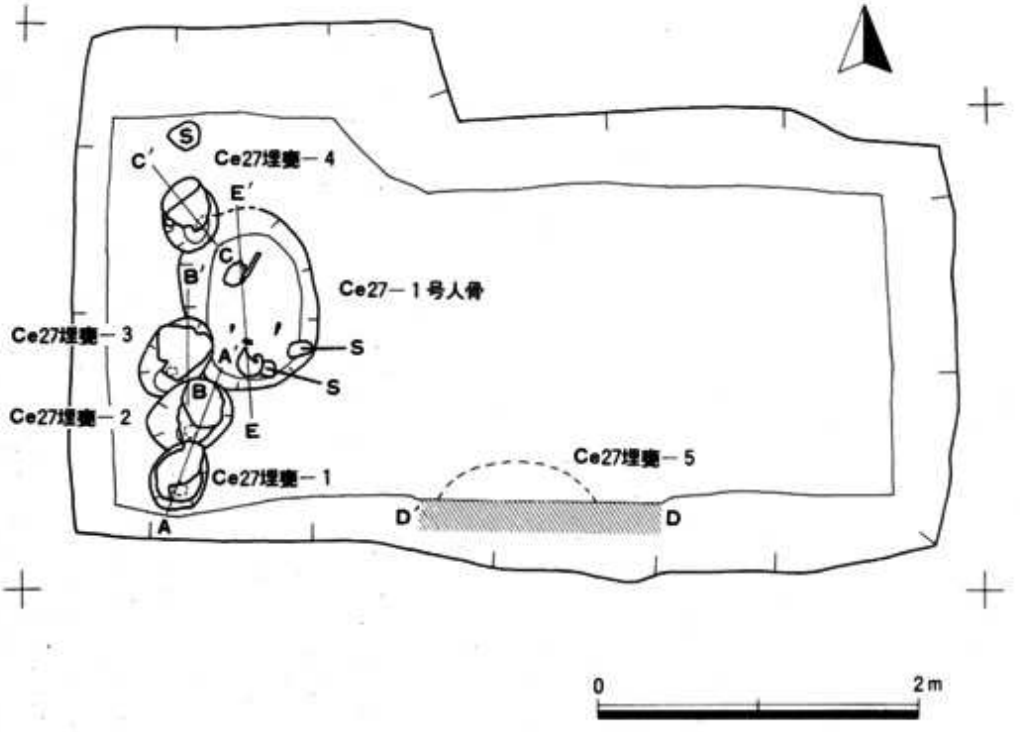
魚・獣骨層からは、主としてクジラ、イノシシなどの哺乳類、カメなどの爬虫類、魚類ではマダイ、カサゴ科の一種などが出土している。

2. Ce27区

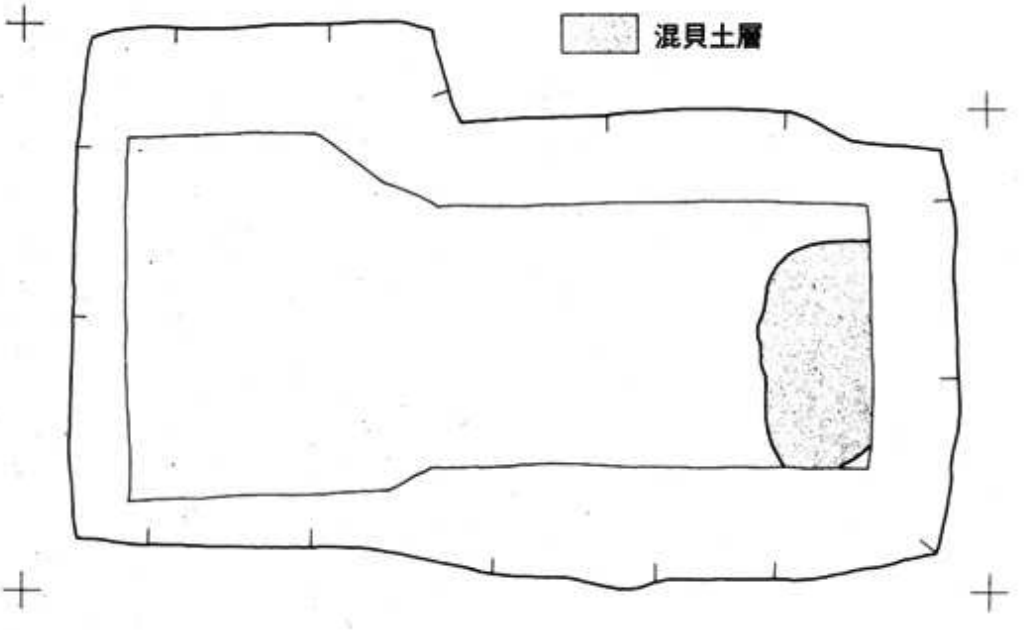
陸前高田市広田町字中沢220－1　吉田タツヨ氏所有雑種地

該区は、丘陵頂部のほぼ中央部に位置する。（PL－3）発掘区は3×6ｍグリッドを設定し、一部拡張した。標高約19ｍである。堆積層は19層に細分され北東側に傾斜する。（第10図 PL－6）

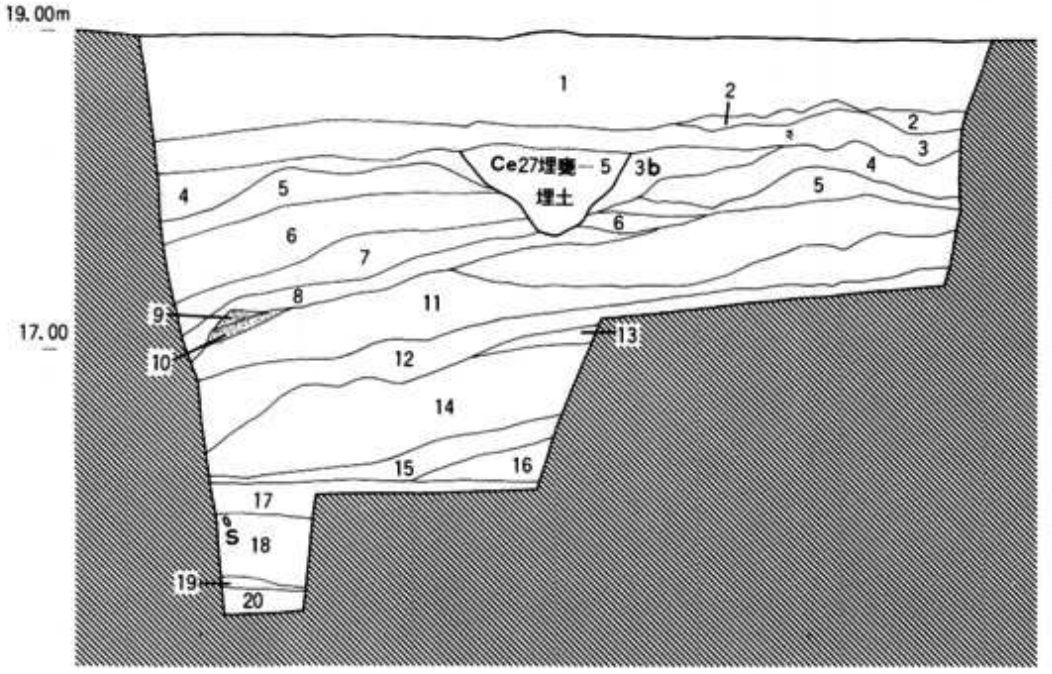
検出した遺構は、埋葬遺構8基である。そのほか貝層の分布も検出した。



第8図　Ce27区埋葬遺構



第9図　Ce27区貝層



大別層	層位	層名	土質	土色		備考
Ⅰ	1	上層	砂	7.5YR4/3	褐色	耕作土
Ⅱ上	2	上層	砂質シルト	7.5YR3/2	黒褐色	径4cm前後の礫含む。
	3	上層	砂質シルト	7.5YR3/1	黒色	遺物包含層・径30cm前後の礫含む・下部遺構検出面。
	3b	(腐根痕)				
Ⅱ下	4	上層	砂	7.5YR5/3	にぶい褐色	径8cm前後の礫含む。
	5	上層	砂	10YR7/2	にぶい黄橙色	径20cm前後の礫含む。上部遺構検出面。
	6	上層	砂	10YR6/4	にぶい黄橙色	カーボン少量・径7cm前後の礫含む。
	7	上層	砂	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR8/1灰白色をブロック状に含む。
	8	上層	砂質シルト	10YR3/4	暗褐色	腐根痕をブロック状に含む。
	8b	上層	砂	10YR5/3	灰黄褐色	カーボン微量含む。
	9	混貝土層	砂質シルト	10YR5/4	灰黄褐色	イガイが主体と思われる。
	10	混貝土層	砂	10YR5/3	灰黄褐色	ムラサキインコガイ、チリバガイが多い。
	11	上層	砂	10YR5/3	灰黄褐色	下部遺構検出面・10YR8/1灰白色をブロック状に含む。礫含む。
	12	上層	砂質シルト	7.5YR3/2	黒褐色	カーボン多量含む。
	13	上層	砂質シルト	7.5YR5/6	暗褐色	カーボン微量含む。
	14	上層	砂	10YR6/4	にぶい黄褐色	腐根痕含む・カーボン多量含む。
	15	上層	砂質シルト	7.5YR5/6	暗褐色	カーボン少量含む。
	16	上層	砂	10YR5/3	灰黄褐色	カーボン微量含む。
	17	上層	砂質シルト	7.5YR5/6	暗褐色	径10cm前後の円礫含む・カーボンを少ブロック状に含む。
Ⅲ	18	上層	シルト	2.5YR5/2	暗灰黄色	径20cm前後の風化礫含む・土器片少量。
Ⅳ上?	19	上層	シルト	2.5YR5/3	黄褐色	径10cm前後の風化礫含む・カーボン少量含む。
Ⅴ	20	基盤	花崗岩風化土	10YR7/6	明黄褐色	地山

第10図　Ce27区南壁

埋葬遺構は、埋甕を穿った小土坑5基と墓坑3基である。発掘区西側に位置し、密集している。上位には埋甕が埋設され、下位に墓坑1基、さらにその下に墓坑2基が構築され、成人骨が埋葬されている。(第8図)

埋甕5個体のうち4個体は、下位の墓坑南北長軸線にほぼ平行して、墓坑西辺部上に埋設され、南寄りに位置する3個体は、新旧関係を伴う。やや離れて北寄りに位置する1個体は、墓坑西辺部に小土坑を穿って埋設される。

また、5個体とも土器内埋土から人骨片は得られていないが、骨葬例としては底部穿孔のあるもの(註1)、また第1年次調査で発掘した新生児骨埋葬の甕棺があり、これらと器形的に類似した深鉢形土器で、一種の甕棺と考えられる。

本稿では、これら深鉢形土器がことに下位の墓坑と密接な関係をもつ埋葬施設を示すものと考えられ、骨葬の可能性のある埋甕として報告している。また、埋葬人骨は墓坑を伴って3体出土しているが、最下位で検出した2体(PL－23)は、西壁に遺存するため未掘である。この2体については、最終年次再調査を予定し、未掘のまま埋戻しを行っているので、詳細は稿を改めて報告したい。

1) Ce27埋甕－1 (第11図a、PL－14、16)

発掘区西側の南壁寄りに位置し、口縁部はほぼ真上でやや北西側に傾く。掘り方が認められる。4層上部で小土坑の輪郭を検出したが、埋甕口縁部は、3層下部から出土する。埋土は土器外はにぶい黄褐色砂で構成され、土器内底部付近は黒味を帯びる。炭化物は微量を含む。

<遺　物> (第12図1、PL－26)

口縁部及び体部の一部が欠損する深鉢形土器である。体部上半で最大径27.0cmを測り、口縁部は僅かに内反する。口縁部形状は小波状口縁をなす。口縁部から体部下半にかけて横位の単節斜縄文(LR・RL)が施され、体部下端は無文である。外面には、口縁部から体部中央付近までカーボンの付着が認められる。器高30.2cm、口径25.3cm、底部径8.9cmを測る。

2) Ce27埋甕－2 (第11図b、PL－14、16)

Ce27埋甕－1の北に接し、小土坑の南辺部は一部切られる。口縁部はほぼ真上でやや北東側に傾く。体部下半の破損が著しい。正位の埋設と推される。小土坑の輪郭は4層上部で検出した。埋土はにぶい黄褐色砂、褐色砂で構成され、土器内はやや暗味を帯びる。

<遺　物> (第12図2、PL－27)

器形は深鉢形土器である。体部の一部が欠損する。土器体部上半で最大径27.5cmを測り、口縁部は僅かに内反する。口縁形状は平縁をなす。口縁部から体部下半にかけて横位の単節斜縄

(註1)　西本豊弘氏(国立歴史民俗博物館助教授)より御教示を賜った。

文（LR・RL）が施され、体部下端は無文である。外面には、口縁部から体部中央付近までカーボンが付着する。器高31.4㎝、口径26.6㎝、底部径7.5㎝である。

3）Ce27埋甕－3（第11図c、PL－14、17）

Ce27埋甕－2の北に接し、小土坑の南辺部は一部切られる。口縁部側は北側に横到し、潰れた状態で検出した。小土坑の輪郭は4層上部にみられる。埋土は、にぶい黄橙色砂、褐色砂で構成される。破損が著しく、土器の一部は内側にも入り込んでいる。

＜遺　物＞（第12図3、PL－28）

口縁部が損失し、全体の1／3程度が残存する深鉢形土器である。体部下半まで横位の単節斜縄文（LR・RL）が施され、体部下端は無文である。外面には、体部下半までカーボンの付着が認められる。残存高35.1㎝、底部径10.5㎝である。

4）Ce27埋甕－4（第11図d、PL－15、18）

Ce27埋甕－3の出土位置よりやや離れた北側に位置する。Ce27－1号人骨の基坑北西辺に接して埋設される。口縁部は北西側に傾きやや潰れた状態で検出した。小土坑の輪郭は、4層で検出される。埋土は、土器外がにぶい黄褐色砂、にぶい黄橙色砂で構成され、土器内は上部がにぶい黄褐色砂、下部は黒褐色砂で構成される。底部穿孔の深鉢である。炭化物は微量含む。

＜遺　物＞（第12図3、PL－28）

全体の1／3程度残存する深鉢形土器である。体部上半で最大径24.0㎝を測る。口縁部は僅かに内反する。口縁形状は平縁をなす。口縁部から体部下端にかけて横位の単節縄文（LR）が施される。底部には、内部から打ち欠いた径3.5㎝程の穿孔を有する。外面には、口縁部から体部中央付近まで部分的にカーボンの付着が認められる。器高32.0㎝、口径22.8㎝、底部径5.6㎝である。

5）Ce27埋甕－5（第11図e、PL－19）

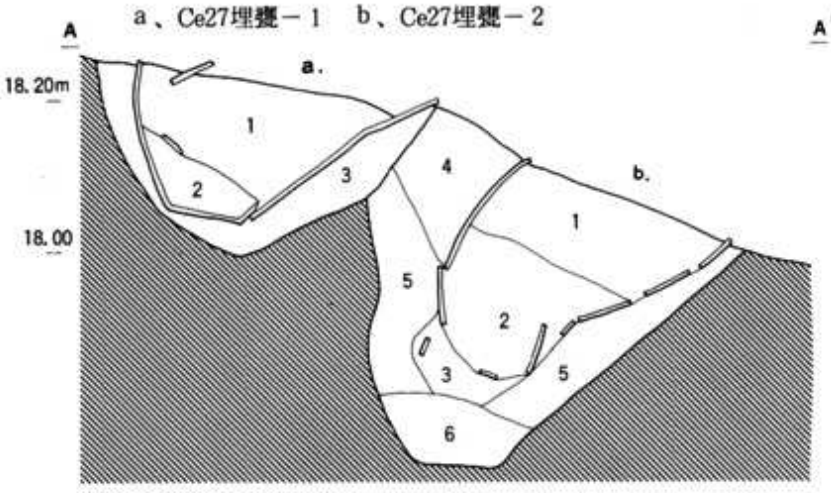
発掘区中央付近の南壁で、壁崩壊時に検出した。小土坑の輪郭は不明であるが、掘り方は4層上面にみられ、底面は8層上部に達する。埋土は、にぶい黄褐色砂、にぶい黄橙色砂で横成され、腐植痕が混入する。破損が著しい。炭化物は全体に少量含む。

＜遺　物＞（第12図e、PL－19）

全体の1／3程度が残存する深鉢形土器である。土器体部上半で最大径27.0㎝を測り、口縁部は僅かに内反する。口縁部から体部下半にかけて横位・斜めの単節斜縄文（LR・RL）が施され、体部下端は無文である。外面には、口縁部から体部中央付近までカーボンの付着が認められる。器高32.0㎝、底部径7.2㎝である。

6）Ce27－1号人骨（第13図、PL－20）

発掘区内西側に位置し、埋甕を穿った小土坑下のやや東寄りで検出した。検出時の墓坑平面

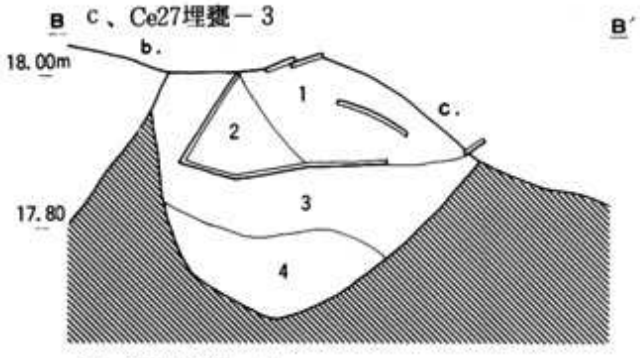


a. Ce27埋甕－1

1	10YR3/3	暗褐色
2	10YR2/3	黒褐色
3	10YR4/3	にぶい黄褐色

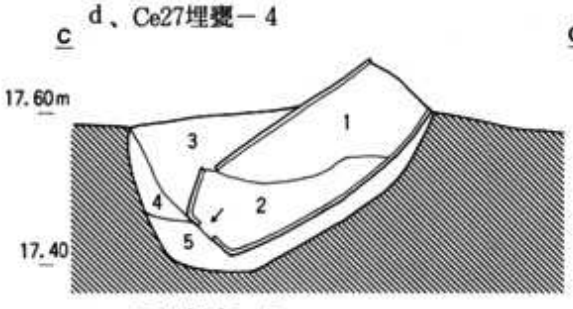
b. Ce27埋甕－2

1	10YR4/4	褐色
2	10YR4/3	にぶい黄褐色
3	10YR4/3+5/3	にぶい黄褐色
4	10YR4/3	にぶい黄褐色
5	10YR6/4+5/3	にぶい黄橙色＋にぶい黄褐色
6	10YR5/4	にぶい黄褐色



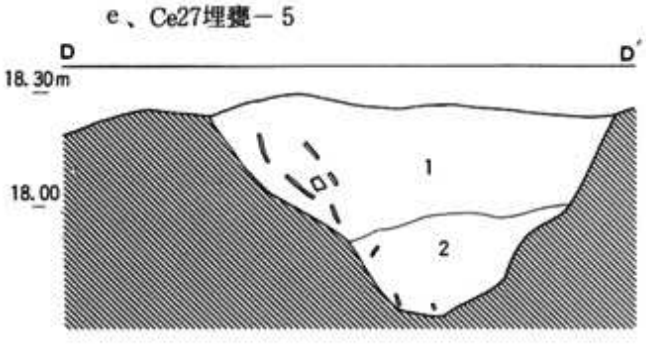
c. Ce27埋甕－3

1	10YR6/4	にぶい黄橙色
2	10YR4/4	褐色
3	10YR4/4	褐色
4	10YR6/3	にぶい黄橙色



d. Ce27埋甕－4

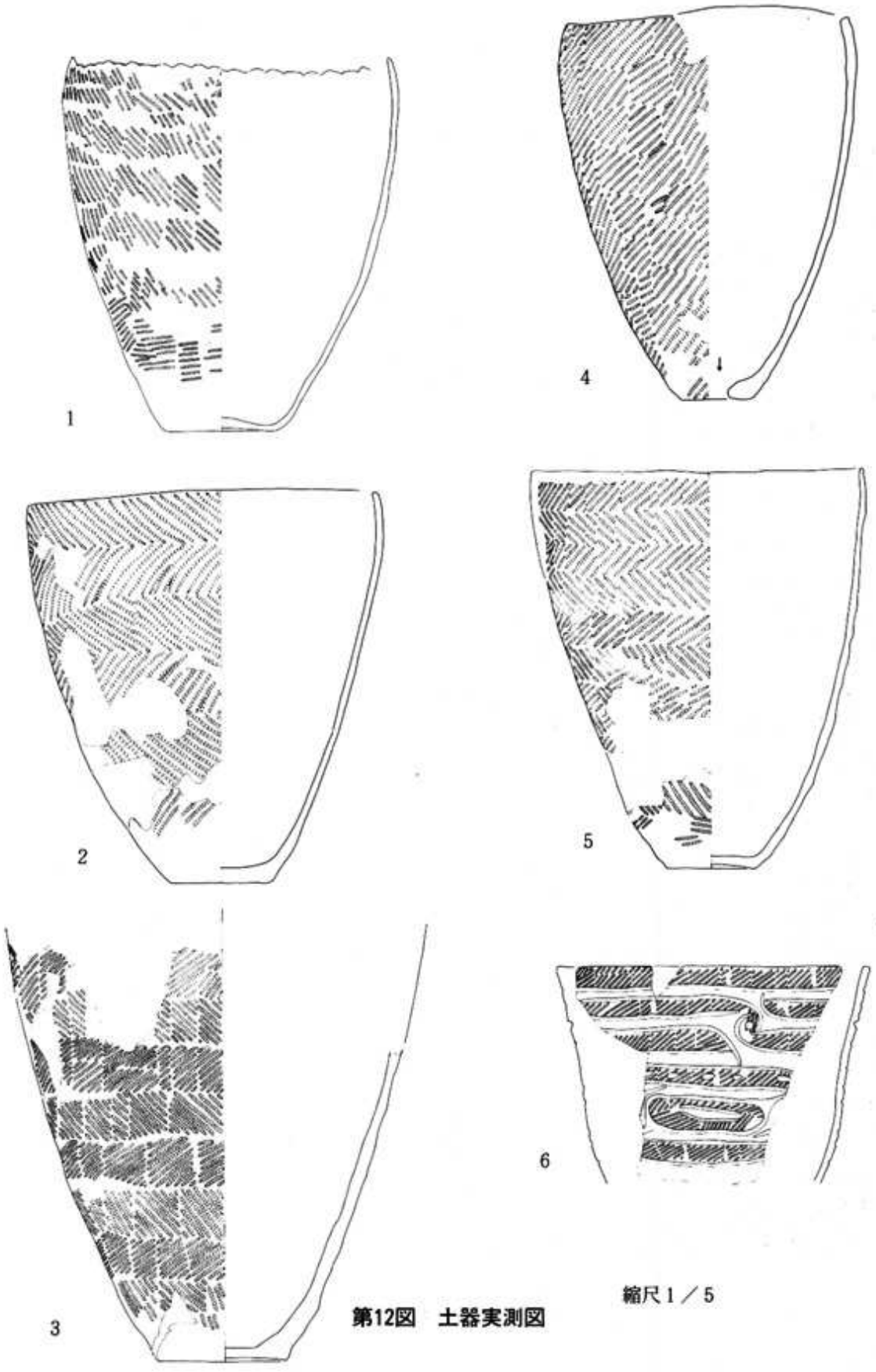
1	10YR5/3	にぶい黄褐色
2	10YR3/2	黒褐色
3	10YR5/4	にぶい黄褐色
4	10YR6/3	にぶい黄橙色
5	10YR5/3	にぶい黄褐色



e. Ce27埋甕－5

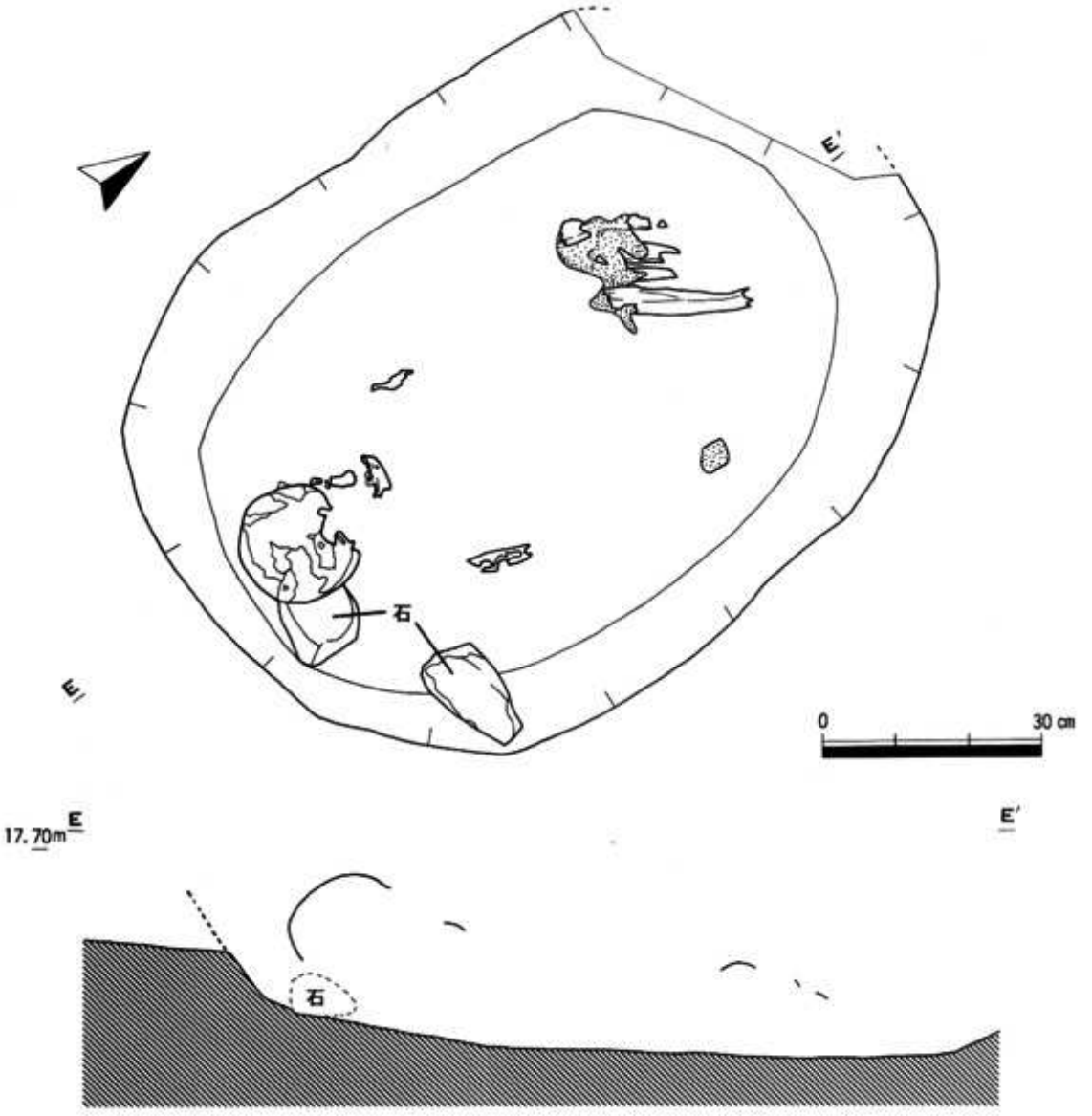
1	10YR5/4	にぶい黄褐色
2	10YR6/4	にぶい黄橙色　腐植痕含む

第11図　Ce27区埋甕（断面）



縮尺1／5

第12図　土器実測図



第13図　Ce27－1号人骨

形は東西0.8 m、南北約1.14 mで楕円形を呈する。長軸方向はN 5°E、深さは墓坑中央部で23 cmを測る。西辺の壁の立ち上がりはやや強く、底部はほぼ平担である。墓坑の輪郭は、5層上部にみられるが、履土と堆積層との色調の区別がつきにくい砂層のため、墓坑上端部は検出されていない。履土は、にぶい黄褐色砂、にぶい黄橙色砂で構成され、不整である。

埋葬人骨は、屈葬と推定されるが、遺存部分は、頭蓋と椎骨の小片、四肢骨の一部で、頭蓋以外は保存状態は不良である。頭位は南で、やや西上向きである。頭部下に台形状（10×10×8 cm）の花崗岩礫を置く。風化が著しく加工痕の有無は観測できないが、頭部に接する面は比

較的平たく滑らかである。石枕と推定される。墓坑南東辺部にも偏平な礫が出土する。副葬品と思われる遺物は出土していない。

7）Ce27区貝層

＜分　布＞（第9図、PL－21）

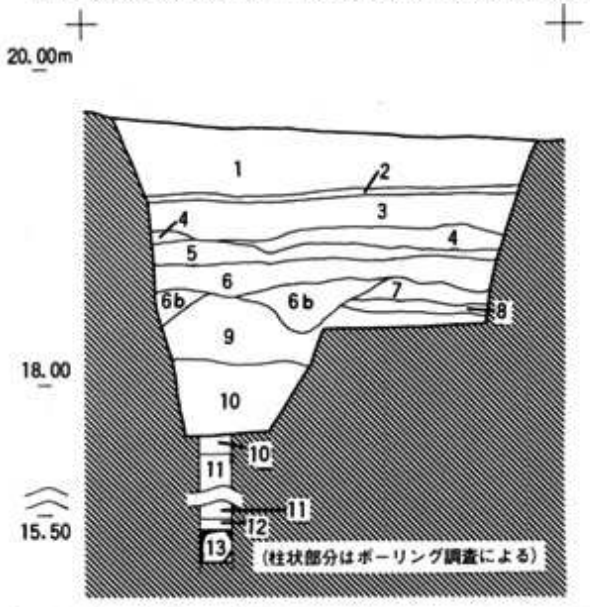
発掘区内の東壁寄りで上端部を検出した。分布は東西約0.7 m、南北約1.4 mで検出した。貝層は混貝土層で2枚に分層される。南壁の一部と東壁に拡がる。

＜遺物と時期＞（第12図6、PL－22a・b）

6は鉢形土器の胴部～口縁部の破片である。器表に玉抱三叉文が施される。縄文後期末葉に属する。そのほか骨針などの骨角器が伴出している。

貝層を構成する貝種は、イガイ、ムラサキインコガイ、ウチムラサキガイ、チリハギガイなどである。下層に比して上層の方が量的に多く貝片が含まれる。

ほかに爬虫類ではカメ、魚類ではカサゴ類、アイナメ、マダイなどが貝層中から出土している。



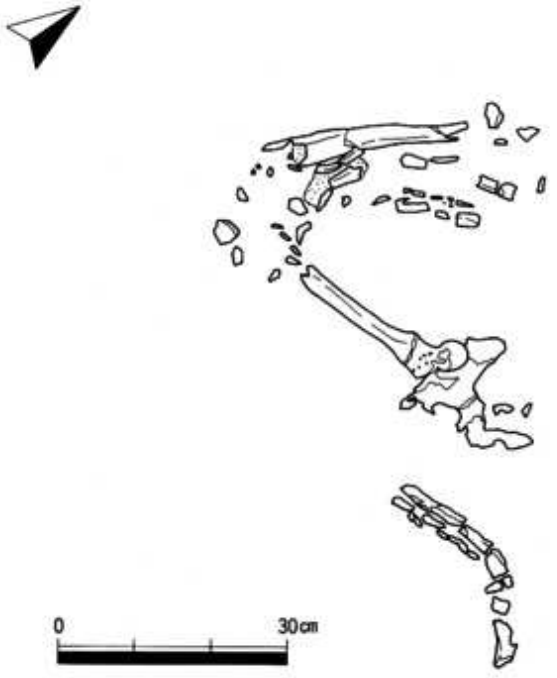
大別層	層位	層　名	土　質	土　色	備　考
Ⅰ	1	土　層	砂	10YR5/4　にぶい黄褐色	耕作土
	2	土　層	砂	10YR5/3　にぶい黄橙色	
	3	土　層	砂	10YR5/3　にぶい黄褐色	
	4	土　層	砂質シルト	10YR3/3　暗褐色	
	5	土　層	砂	10YR5/3　にぶい黄橙色	カーボン微量含む。
	6	土　層	砂	10YR5/2　灰黄褐色	腐根痕含む・径10cm前後の礫含む。
	6b	(腐植痕)			
	7	土　層	砂	10YR3/2　灰黄褐色	上部遺構検出面・10YR8/1灰白色をブロック状に含む。
Ⅱ下？	8	土　層	砂	10YR3/2　にぶい黄橙色	径5cm前後の礫含む。
	9	土　層	砂	10YR5/2　灰色褐色	
	10	土　層	砂	10YR3/2　灰黄褐色	カーボン微量含む。
	11	土　層	砂	10YR5/4　にぶい黄橙色	
	12	土　層	砂質シルト	10YR3/2　黒褐色	土器片少量
Ⅴ？	13	岩　盤			

第14図　Da27区西壁

3. Da27区

陸前高田市広田町字中沢 220 － 1　吉田タツヨ氏所有雑種地

該区は、丘陵頂部の南端部でCe27区の真南にあたる。（PL－4 a）発掘区は西区として3×3 mグリッドを設定した。



第15図　Da27－1号人骨

遺構は検出しなかったが、散乱した人骨が出土している。

発掘区内の堆積層は10層に細分される。各層とも層厚を異にするが、ほぼ平担に堆積する。（第14図 PL－7）

出土遺物は少なく、人骨片以外は主に土器細片が出土している。

1）Da－1号人骨（第15図、PL－24）

発掘区内西寄りで検出した。散乱人骨である。四肢骨の一部が遺存し、屈葬と推定される埋葬形態をとどめている。そのほかの部位骨は、小破片で、検出層のほぼ全面に四散している。埋葬期は、時期を知る遺物が出土していないため不明である。

4. Da34区

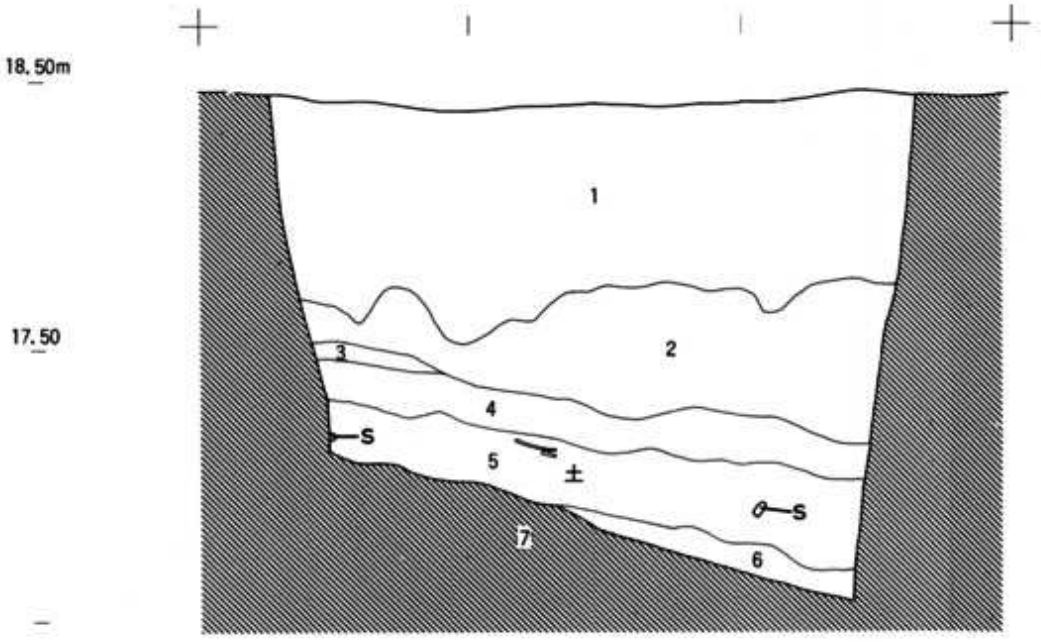
陸前高田市広田町字中沢 183　小野寺高雄氏所有宅地

該区は、丘陵頂部の南端部でDa27区の真東にあたる。（PL－4b）発掘区は東区として3×3 mグリッドを設定した。

遺構は検出しなかったが、遺物包含層を検出した。発掘層下位に分布し、厚層は最大厚33cmを測る。南方向に緩傾斜して堆積する。（第16図、PL－8）

遺物は、主に縄文晩期中葉に属する土器が出土している。中期末葉の土器片も混在する。そのほか石器、フレーク、軽石などが出土している。また弓筈形角器などの骨角器が出土する。

動物遺存体は、大半は脆弱化しているため出土種や部位は判明されていないが、イノシシの



大別層	層No.	層　名	土　質	土　色	備　考
I	1	土　層	砂	10YR3/2 黒褐色	耕作土
	2	土　層	砂	10YR5/4 にぶい黄褐色	
	3	土　層	砂	10YR5/4 にぶい黄橙色	
	4	土　層	砂	10YR4/3 にぶい黄褐色	カーボン微量含む。
II上	5	土　層	砂質シルト	7.5YR3/1 黒褐色	遺物包含層
III?	6	土　層	シルト	2.5Y4/2 暗灰黄色	マサ土含む・粘性弱・しまる。
V	7	基　盤	花崗岩風化土	10YR7/6 明黄褐色	地山

第16図　Da34区東壁

下顎骨などの哺乳類が出土している。(PL－25)

VI、動物遺存体

動物遺存体は、現段階では貝類14種、脊椎動物16種、爬虫類２種、哺乳類６種の合計38種を同定している。これらの同定種は、主に純貝層、混貝土層、貝ブロック、魚・獣骨層の各サンプリング資料のほか、遺物包含層出土資料から得られている。一覧表はその結果をもとに作成してある。

なお、貝類を除く動物遺存体の同定にあたっては、発掘調査時に国立歴史民俗博物館助教授西本豊弘氏の来訪をえ、種々ご指導とご教示をいただいたほか、東北学院大学学生熊谷賢氏に忙しい中同定していただいた。記して感謝する次第である。

貝　類

貝類として、腹足綱に９種、二枚貝綱に５種が検出された。貝層を構成する主体種は、イガイ、ムラサキインコガイと思われるが、大半は殻頂部を欠いた破損貝のため明確ではない。アサリ、クボガイはほぼ完存貝のまま得られている。またこれら同定種の中には、当時の生活をした人々の食糧資源にはなり得ない陸貝も含まれている。

魚類、爬虫類

魚類では16種、爬虫類では２種検出した。今回の調査では、３㎜メッシュのフルイを使用しフルイ分析以外得られにくいイワシ類なども検出した。魚類は内湾系の魚種が多い。

哺乳類

哺乳類では、６種検出した。

以上のほかに同定不能な骨片があるが、中には鳥類なども含まれている。また人骨も出土している。また種名一覧表の作成にあたっては、主に学研の生物図鑑「貝Ⅰ」（波野、1983）、同「貝Ⅱ」（同）、同「魚類」（落合、1983）、同「動物」（今泉・岡田、1983）を用いたほか、保育社の「原色日本陸産貝類図鑑」（東、1982）を参考とした。

動物遺存体種名一覧表

Ⅰ　軟体動物門　MOLLUSCA

ⅰ　腹足綱　GASTROPODA

1. クボガイ　*Chlorostoma argyrostoma lischkei* (Tapparone-Canefri)
2. タマキビガイ　*Littorina brevicula* (Philippi)
3. チヂミボラ　*Nucella heyseana* (Dunker)
4. オカモノアラガイ　*Succinea lauta* Gould
5. マルオカチョウジガイ　*Allopeas brevispira* (Pilsbry et Hirase)
6. オカチョウジガイ　*Allopeas kyotoensis* (Pilsbry et Hirase)
7. ホソオカチョウジガイ　*Opeas pyrgula* (Schmacker et Boettger)
8. パツラマイマイ　*Discus pauper* (Gould)
9. ヒダリマキマイマイ　*Euhadra quaesita* (Deshayes)

ⅱ　二枚貝綱　BIVALVIA

1. ムラサキインコガイ　*Septifer* (Mytilisepta) *virgatus* (Wiegmann)
2. イガイ　*Mytilus corsucus* Gould
3. チリハギガイ　*Lasaea undulata* Gould
4. ウチムラサキガイ　*Saxidomus purpuratus* (Sowerby)

5. アサリ　*Ruditapes philippinarum* (Adams et Reeve)

II 脊椎動物門　ARTHROPODA

i 軟骨魚綱　CHONDRICHTHYES

1. サメ目の一種　*Lamniformes fam. indet.*

ii 硬骨魚綱　OSTEICHTHYES

1. マイワシ　*Sardinops melanosticta* (Temminck et Schlegel)
2. カタクチイワシ　*Engraulis japonica* (Houttuyn)
3. マアナゴ　*Conger myriaster* (Brevoort)
4. マダイ　*Pagrus major* (Temminck et Schlegel)
5. マアジ　*Trachurus japonicus* (Temminck et schlegel)
6. ブリ　*Seriola quinqueradiata* Temminck et Schlegel
7. マグロ類　*Thunnus spp.*
8. カツオ　*Katsuwonus pelamis* (Linnaeus)
9. マサバ　*Scomber japonicus* Houttuym
10. ウミタナゴ　*Ditrema temmincki* Bleeker
11. コブダイ　*Semicossyphus reticulatus* (Cuvier et Valenciennes)
12. カワハギ科の一種　*Momacan thidae gen.et sp.indet.*
13. カサゴ科の一種　*Scorpaenidae gen.et sp.indet.*
14. アイナメ　*Haxagrammos otakii* Jordan et Starks
15. ヒラメ　*Paralichthys olivaceus* (Temminck et Schlegel)

iii 爬虫綱　REPTILIA

1. カメ目の一種　*Chelonia fam. indet.*
2. ヘビ目（亜目）の一種　*Ophidia fam. indet.*

iv 哺乳綱　MAMMALIA

1. 齧歯目の一種　*Rodentia fam. indet.*
2. イル科の一種　*Delphinidae gen. et sp. indet.*
3. クジラ類　*Cetacea fam. indet.*
4. タヌキ　*Nyctereutes procyonoides* Gray
5. イノシシ　*Sus scrofa leucomystax*
6. シカ　*Cervus nippon*

Ⅶ、まとめ

今回の調査で検出した遺構は前述したように埋葬遺構８基、土坑２基がある。貝層の分布は２ケ所で、そのほか遺物包含層がある。

埋葬遺構は、中央部に集中し、重複して構築されるもので、新旧関係を伴う埋甕５個体と埋葬人骨３体が出土した。最上位に構築される遺構は、埋甕を穿った小土坑で、最も新しいと思われる遺構の輪郭は縄文晩期中葉の遺物包含層でみとめられたが、大半はその下層に認められ、埋土も下層にほぼ連続するものであった。また、最下位の墓坑は、縄文後期末葉の遺物包含層に構築されるものであった。このことから理葬の時期は、後期末葉以降連続して構築されたものと考えられる。南端部西区からは散乱人骨１体が出土したが時期は不明であった。現段階では部分的な調査範囲のため、墓域の範囲を明確に把握することはできないが、これら遺構の配置や分布密度から中央部の未調査区域である南西側平担部分を範囲として遺構が構築されている可能性がある。

土坑は、北端部に分布し、北斜面上辺部に構築される。遺構の時期は、埋土内底部からの出土土器が得られていないため明確ではないが、縄文前期末葉～中期前葉に属する大木５～７式期の土器が混在する遺物包含層下部に遺構の輪郭がみとめられることから、この時期に相当するものと思われる。

貝層は、縄文後期末葉と前期中葉のものであった。前者は、.埋葬遺構を検出した中央部の発掘区東側に分布する２枚の混貝土層である。レンズ状に堆積することから小規模の分布と思われる。後者は、土坑が検出される北端部に分布する保存良好な純貝層で、直上下層に魚・獣骨層、混貝土層が形成されていた。北斜面上辺部に貝層の上端部があり、下方に向かって層厚を増しており、また付近の斜面上にも縄文時代の土器をはじめ、貝殻などの散布もみられることからこの北斜面一帯に広範囲に及んで形成されているものと推定される。

遺物包含層は、南端区東区にも分布する。この包含層を構成する土器の時期は、縄文晩期中葉のものが大半であった。遺構は未検出であったが、比較的土器がまとまって出土していることから、発掘区北側の未調査部分に遺構の所在が予想される。

以上今回の調査成果を略述したが、本貝塚における墓域の所在は第１年次調査区となった貝塚南斜面南端部でも確認されており、また貝層の分布では、ことに北斜面で検出した縄文前期中葉と同時期のものが、第３年次調査区となった南斜面東側でも確認されている。今回の調査は、新たに墓域の所在や貝層の分布を明らかにするものであった。来年度最終年次調査は、これまでの調査の結果から隣接地を補足調査として行う予定であるが、貝塚を営んだ人々の食生活や風習のみならず、集落跡も解明する手がかりが得られることを期したい。

参考文献

木下忠　1981：考古学選書18（埋甕－古代の出産習俗）雄山閣

阿部恵・手塚均・笠原信男他　1986：宮城県文化財調査報告書第111集（田柄貝塚Ⅰ）、宮城県教育委員会

春成秀爾　1985：（愛知県伊川津遺跡の調査）、伊川津遺跡発掘調査団、考古学雑誌第70巻第3号抜刷

佐藤正彦他　1985：陸前高田市文化財報告第9集（中沢浜貝塚発掘調査概報Ⅰ）、陸前高田市教育委員会

同　1986：同　第10集（同　Ⅱ）、同

同　1987：同　第11集（同　Ⅲ）、同

付　編

中沢浜貝塚出土の縄文時代人骨

－昭和62年度発掘資料－

札幌医科大学解剖学教室
百　々　幸　雄

昭和62年度の発掘調査において、２体の埋葬人骨が発見された。以下にこれらの人骨の人類学的所見を報告する。

Da27－１号人骨（図版１）　時期不明

上肢骨は右上腕骨の破片と左尺骨骨体が残存するのみである。下肢骨は左の寛骨と大腿骨上部三分の二、右脛骨上部三分の一、左脛骨骨体、右腓骨の小片、左腓骨骨体が保存される。頭骨と体幹の骨は欠損する。

四肢骨の太さ、筋付着面の発達状態からみて、**成人男性**の骨格と考えて良い。

上腕骨：右骨体下部の長さ７㎝程の破片が残存するのみである。

尺　骨：左の骨体が長さ約17㎝にわたって保存される。中央最大径は17㎜、同最小径は11㎜で中央横断示数は 64.7 となり、骨体中央部は著しく扁平である。

大腿骨：下端を欠損するが、左大腿骨の大部分が保存される。筋付着面の発達は良好で、特に殿筋粗面が強く発達している。骨体中央矢状径は28㎜、同横径は29㎜で、中央横断示数は 96.6 となる。中央横断示数が 100 以下となるのは縄文人では極めて珍しいことであるが、これは粗線の発育が弱いためではなく、横径が異常に大きいことに起因している。体上部最大径、最小径はそれぞれ33㎜、24㎜で、体上部横断示数は 72.7 となり、この部分は著しく扁平である。

脛　骨：右は上部三分の一が残るのみであるが、左は骨体がほぼ全長にわたって保存される。筋付着部の発達は良好であり、左右ともヒラメ筋線が著しく強く発達する。左骨体中央矢状径は31㎜、同横径は21㎜で、中央横断示数は 67.7 となり、体中央部はかなり扁平である。ヒラメ筋線が強いため、栄養孔部での横断示数は 52.3 となり、この部分は著しく扁平である。

腓　骨：右は小破片が残るだけであるが、左は骨体が比較的良く保存される。筋付着部は強く発達し、外面には凹溝形成も見られる。

なお、左尺骨の後縁、左脛骨の後面上部には、げっ歯類と思われる動物の咬痕が多数認められる。

Ce27－1号人骨（図版2）　縄文後期末葉

頭骨は大部分が残存するが、椎骨と四肢骨は小片が残るだけである。

頭　骨：顔面、前頭骨および右頭頂骨から右側頭鱗にかけての部分が欠損する。三主縫合は内、外板においてほとんど消失しているので、年齢は**熟年ないし老年**と推測される。乳様突起は強大で、筋付着部も強く発達するので、性別は**男性**と判定される。外後頭隆起はほとんど形成されないが、項平面の筋粗面は強い。乳突上稜、乳突上溝はともに良く発達する。舌下神経管は右は単一であるが、左は骨橋により完全に二分される。右は破損のため不明であるが、左に外耳道骨腫はない。鼓室骨裂開（フシュケ孔）も左右とも認められない。下顎では、やはり筋粗面が強く発達する。下顎角は強く外反する。右は破損のため不明であるが、左に顎舌骨筋神経管は認められない。

主な計測値は次のとおりである。バジオン・ブレグマ高134㎜。最大後頭幅113㎜。下顎枝高57㎜。下顎枝幅36㎜。

歯：下顎左右第1、第2大臼歯が残存する。下顎左第3大臼歯は歯根のみ残るが、右第3大臼歯は生前に脱落したものと思われる。咬耗はほぼ水平で、第1大臼歯でⅢ度、第2大臼歯でⅡ度の段階にある。左第2大臼歯歯頚部頬側面にはむし歯によると思われる腐蝕像が認められる。

椎　骨：第2頸椎歯突起と上位頸椎の椎体が残るのみである。

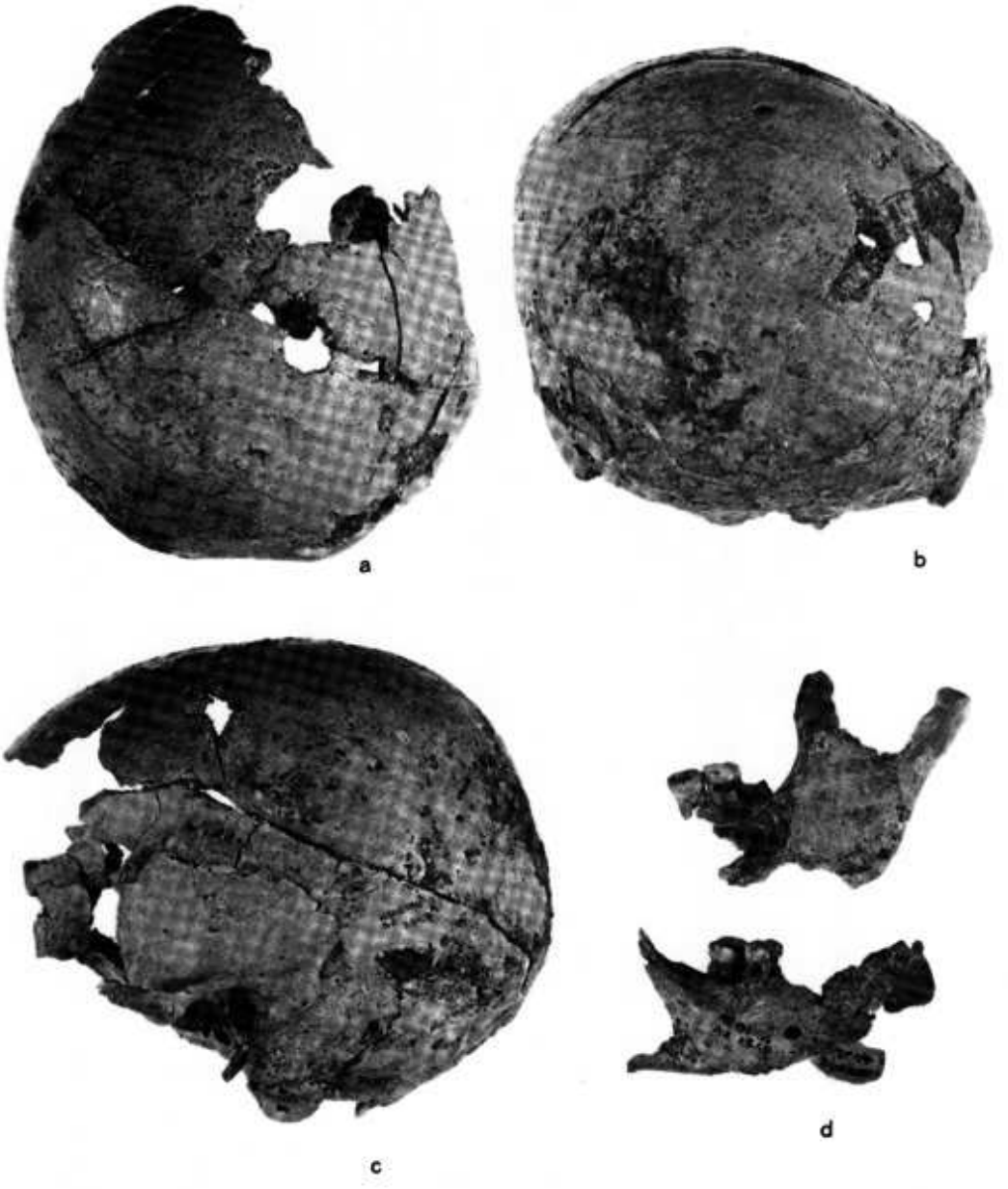
四肢骨：右上腕骨の骨体の小破片が同定される。三角筋粗面の発達は良好である。

まとめ

1号人骨は成人男性の四肢骨からなる。大腿骨からなる。大腿骨に柱状性がみられないといった特異な点がみられたが、筋付着部が強く発達していることや脛骨が扁平であることなどを考え合わせると、やはり縄文人の特徴が表出されていると考えて良いであろう。

2号人骨は主として熟年ないし老年男性の頭骨からなる。乳突上稜が著しく強いほか、筋付着部が概して良く発達すること、歯の咬耗が著しいこと、舌下神経管が二分することなどに、縄文人の特徴が良く表れていると言える。

図版1　Da27−1号人骨



a．頭骨上面観
b．頭骨後面観
c．頭骨左側面観
d．下　　顎

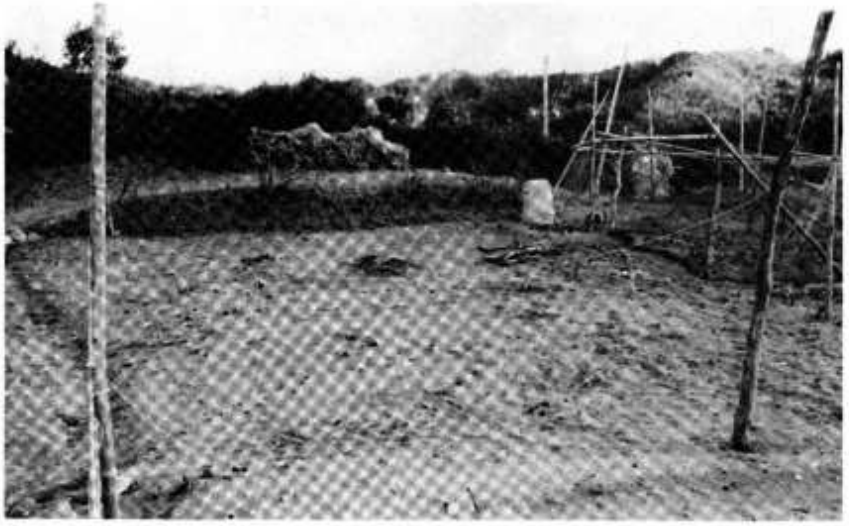
図版2　Ce27－1号人骨

PL−1　空中写真

PL－2
調査区風景
（北端部）

（Bh24区、南西より）

PL－3
調査区風景
（中央部）



（Ce27区、北西より）

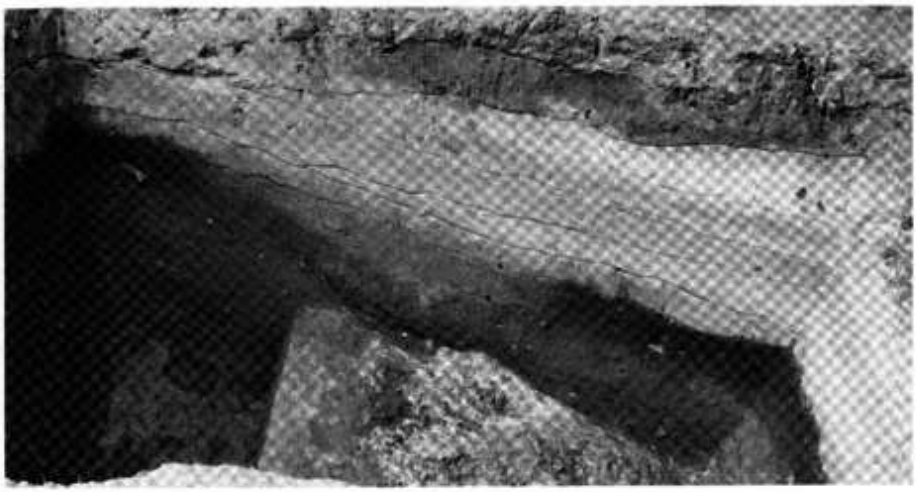
PL－4
調査区風景
（南端部）

a 西区（Da27区、南より）

b 東区（Da34区、西より）

PL－5

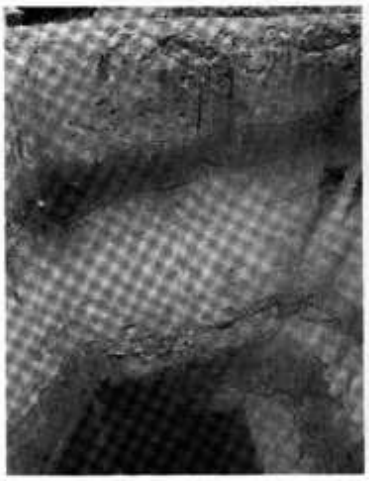
北端部基本層序



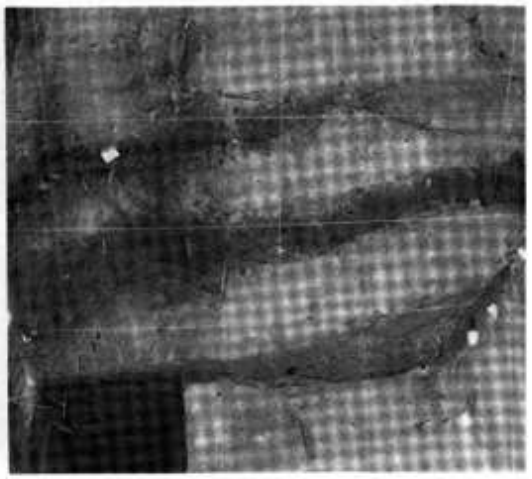
(Bh24区西壁)

PL－6

中央部基本層序



東壁

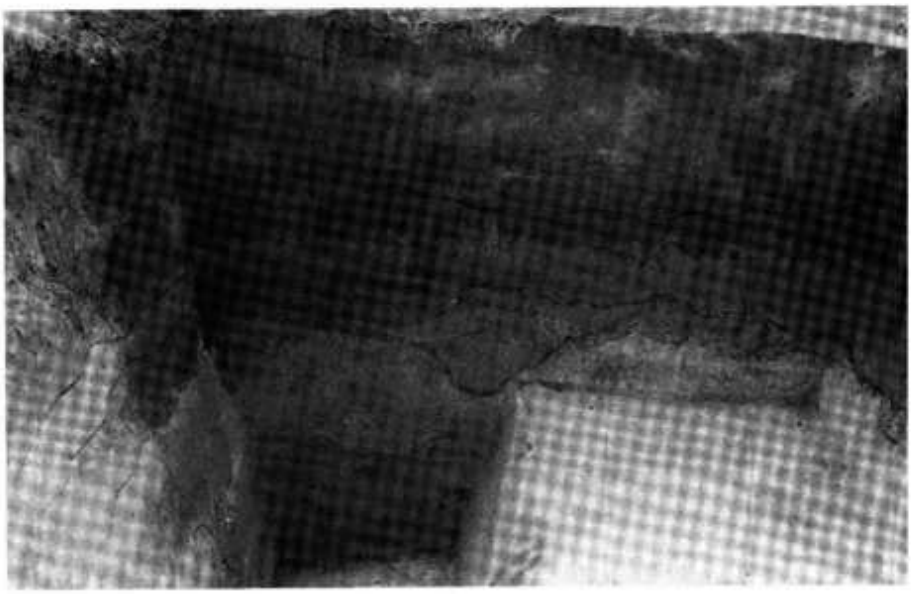


南壁

(Ce27区)

PL－7

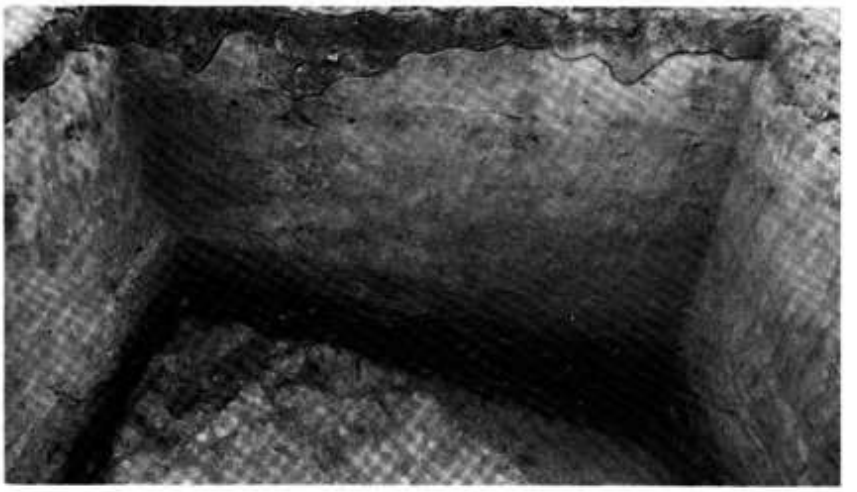
南端部西区基本層序



(Da27区西壁)

PL－8

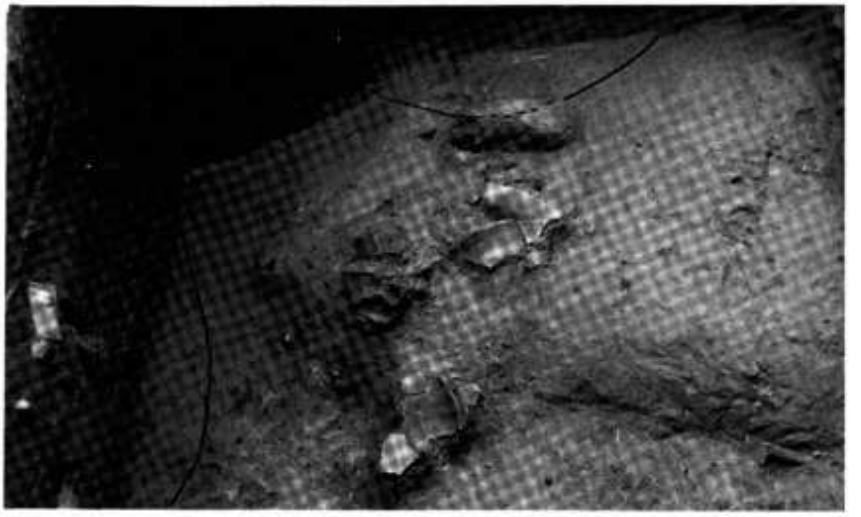
南端部東区基本層序



(Da34区東壁)

PL－9

Bh24区土坑

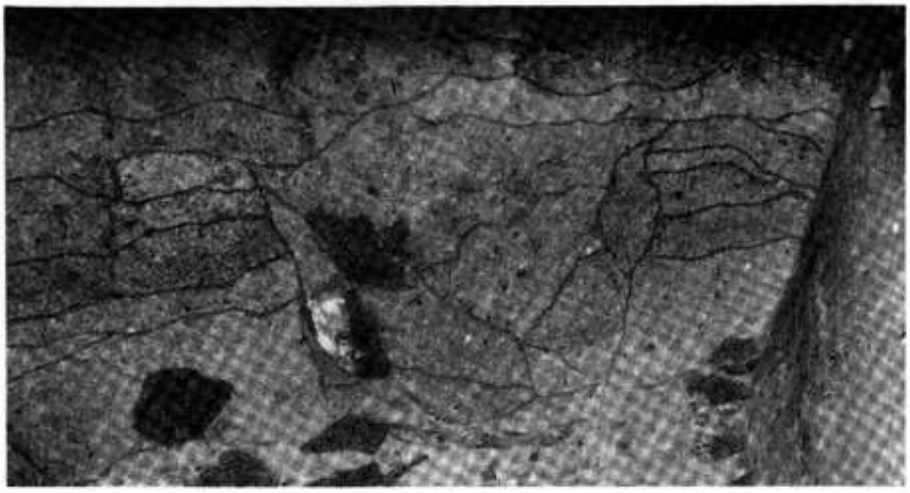


PL－10

Bh24区貝層

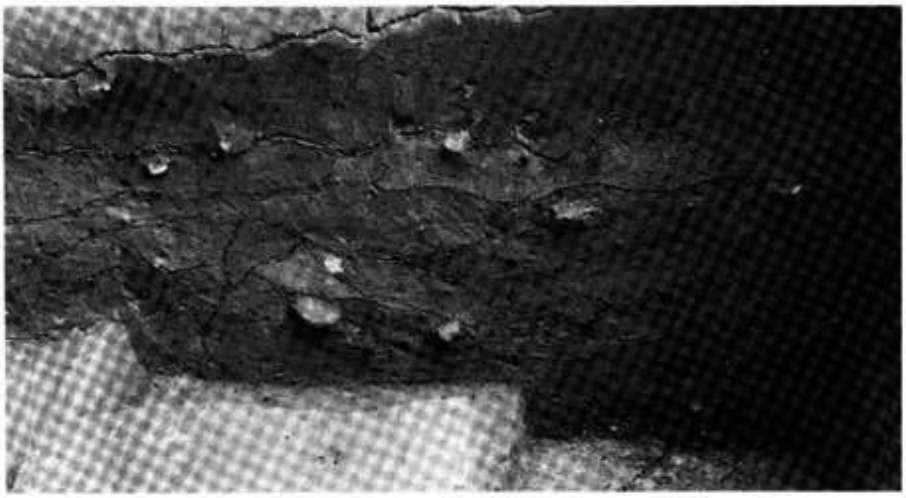
PL－11

Bh24土坑－1埋土



PL－12

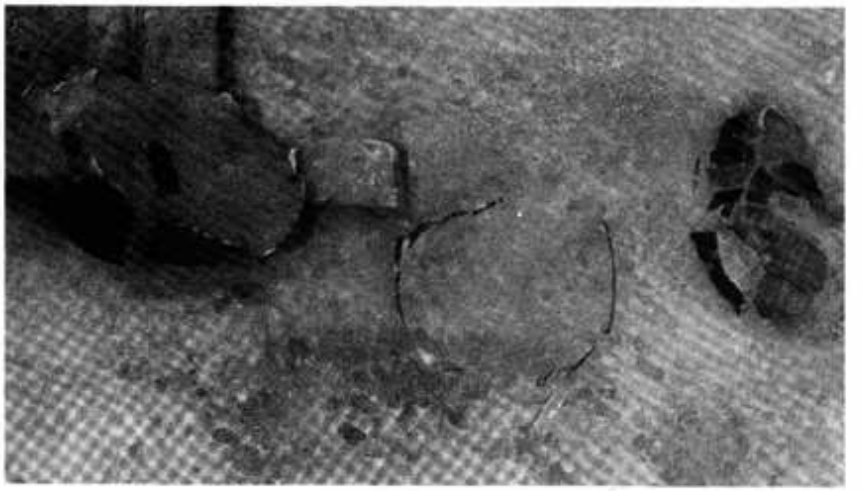
Bh24土坑－2埋土



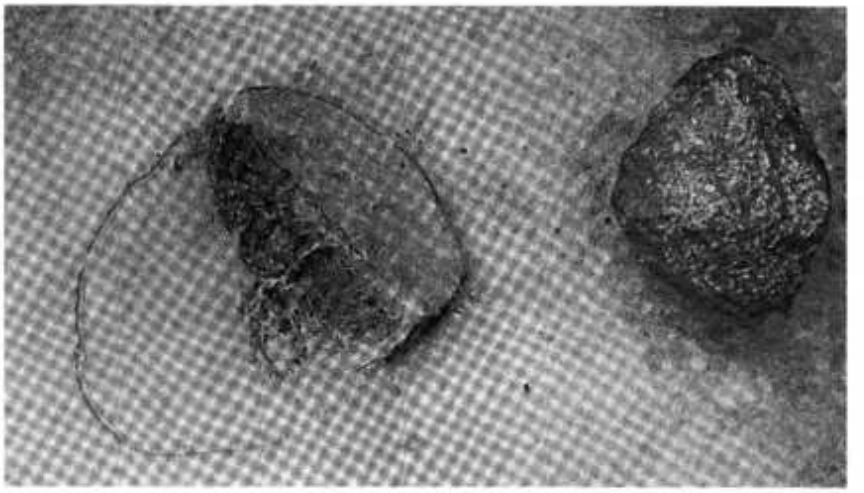
PL－13

Bh24区貝層伴出遺物

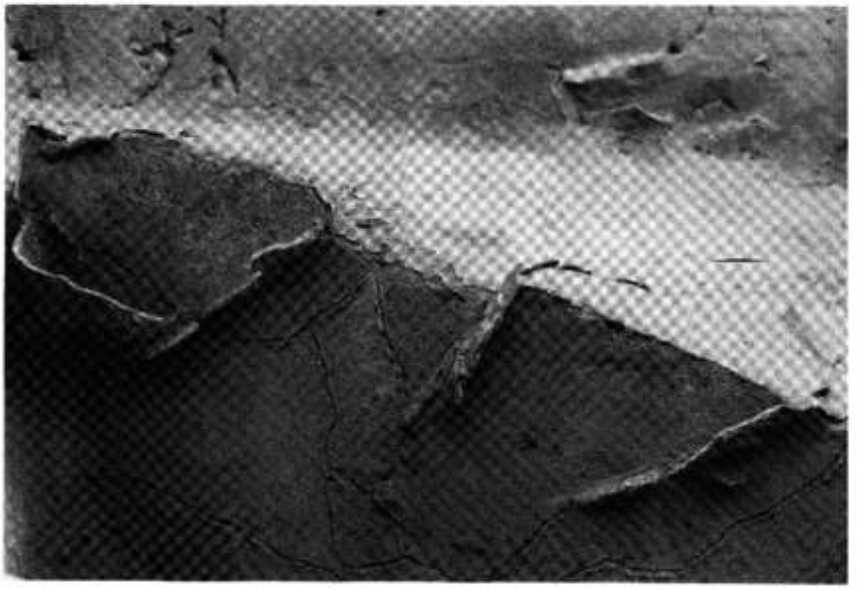
PL－14
Ce27埋甕－1、2、3
（平面）



PL－15
Ce27埋甕－4
（平面）

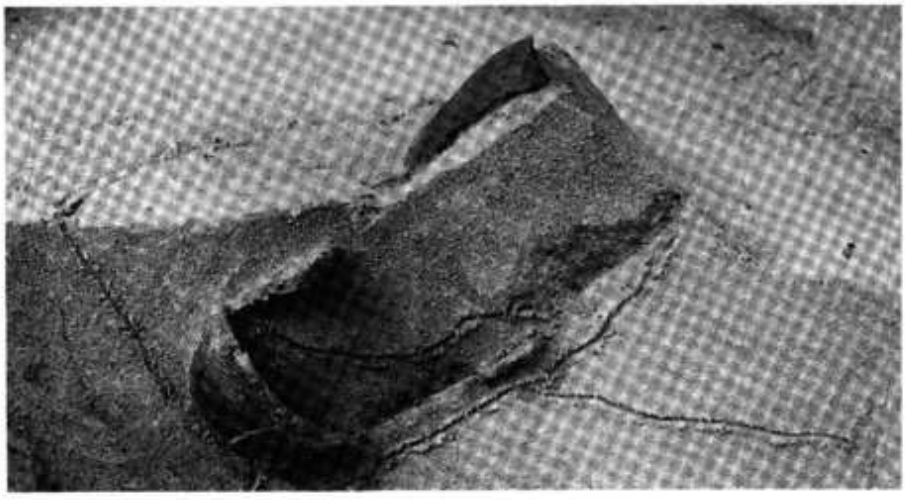


PL－16
Ce27埋甕－1、2
（断面）

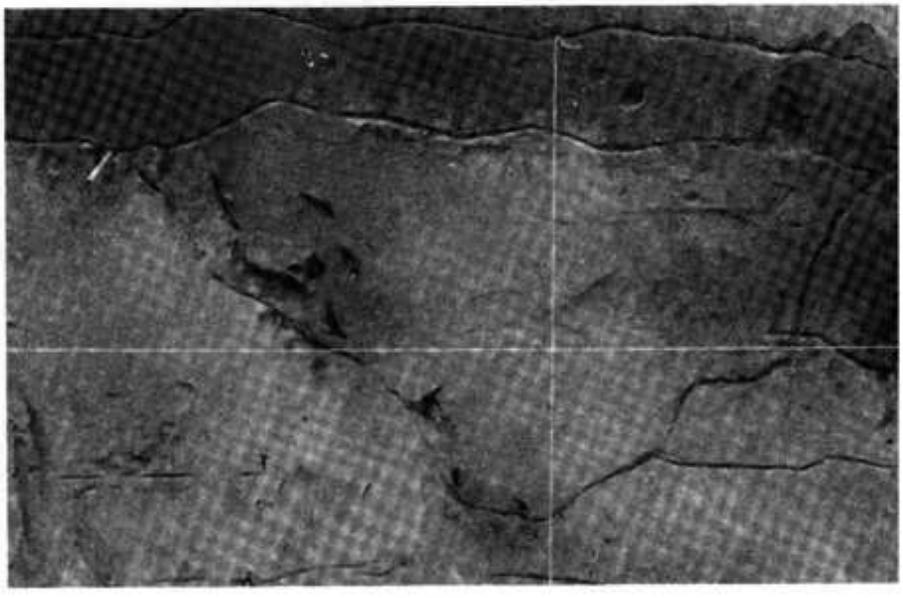


PL－17
Ce27埋甕－3
（断面）

PL－18
Ce27埋甕－4
（断面）



PL－19
Ce27埋甕－5
（断面）

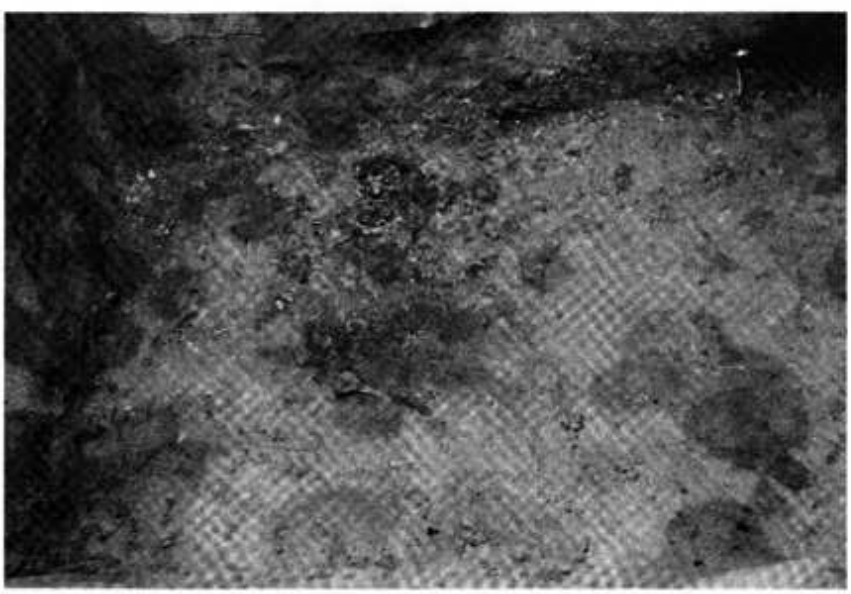


PL－20

Ce27－1号人骨

PL－21

Ce27区貝層

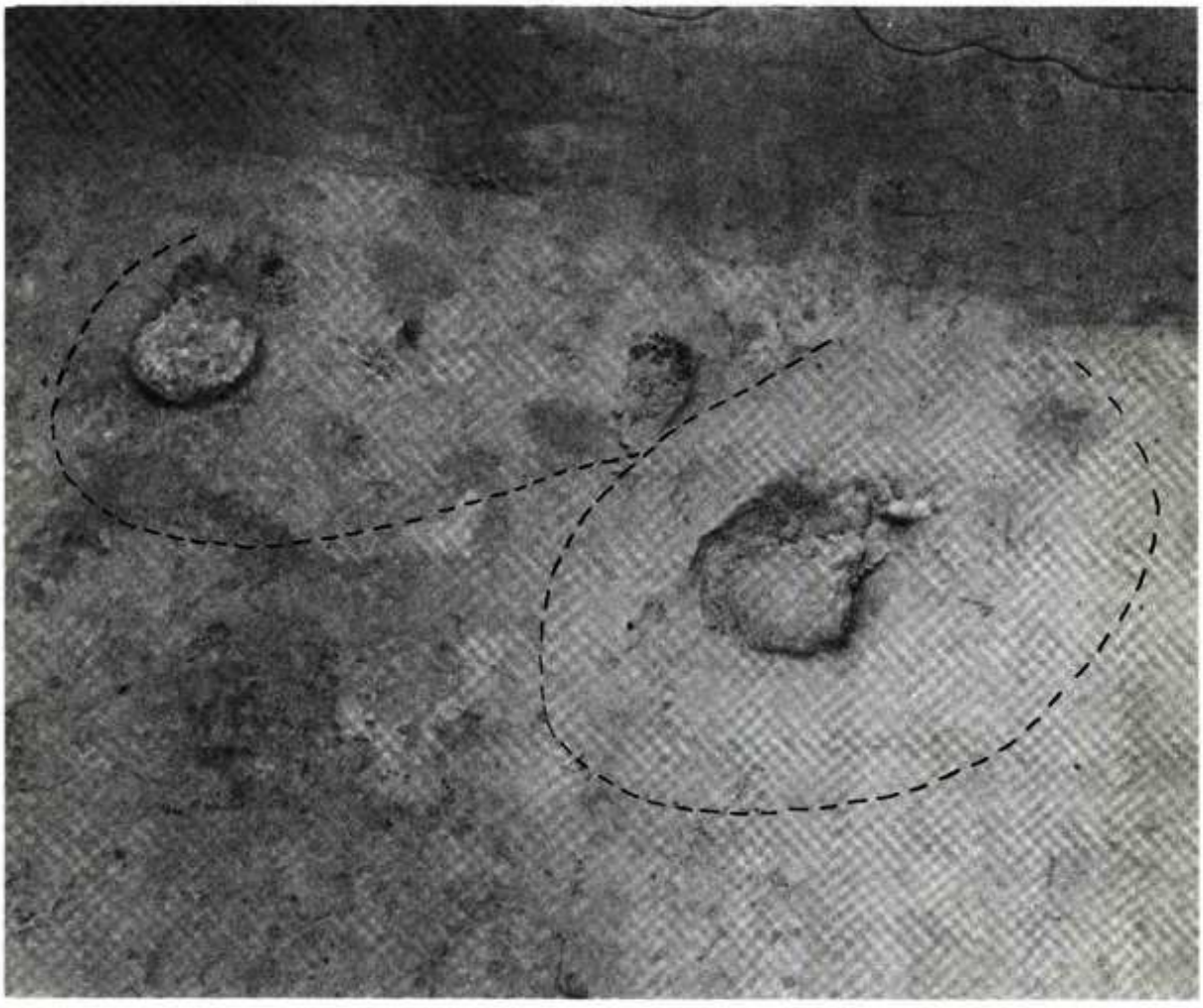


PL－22

Ce27区貝層伴出遺物

a　　b

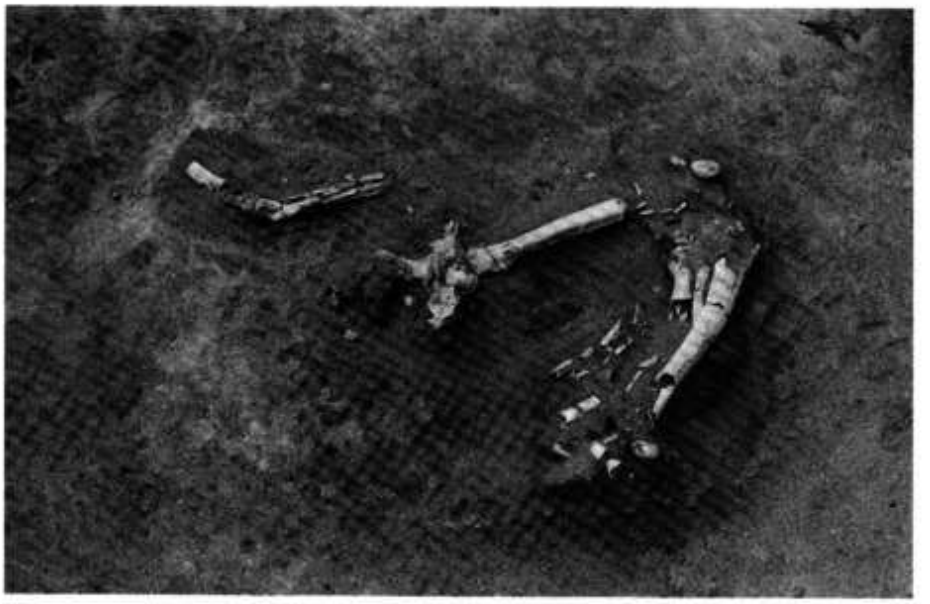
a　遺物（骨針）　　b　遺物（土器）



PL－23　Ce27－2号・3号人骨

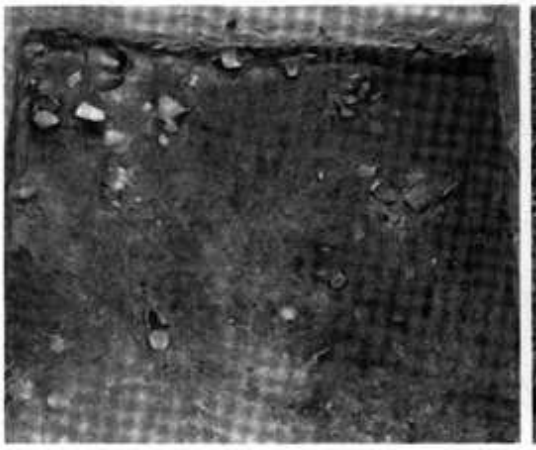
PL－24

Da27－1号人骨



PL－25

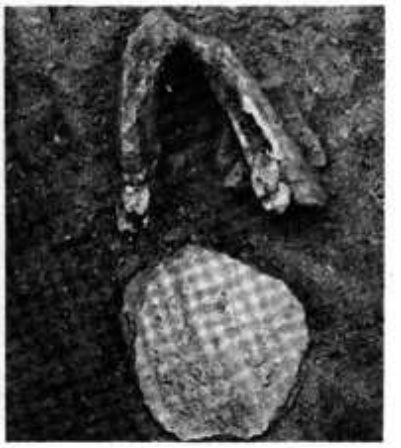
Da34区遺物包含層



a　遺物検出状況

b　遺物（石鏃）

a　遺物（土器）



b　動物遺存体（イノシシ下顎骨）

PL－26

Ce27埋甕－1

PL－27

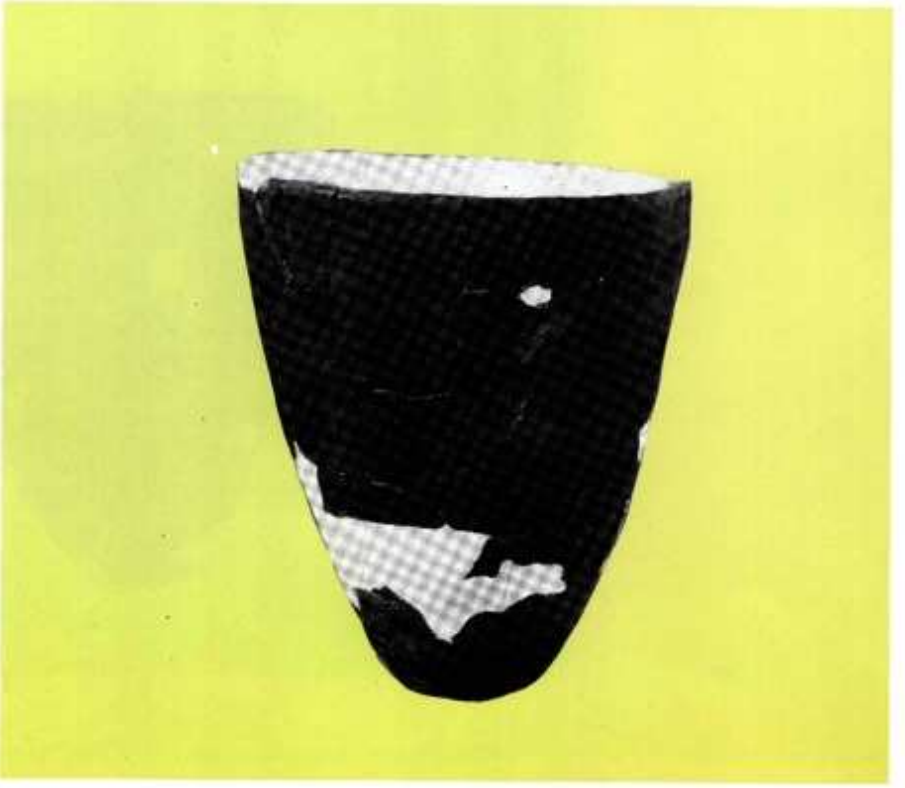
Ce27埋甕－2

PL－28

Ce27埋甕－3

PL－29

Ce27埋甕－5



PL－30

Ce27埋甕－4

岩手県陸前高田市

中沢浜貝塚発掘調査概報Ⅳ

（陸前高田市埋蔵文化財報告書第12集）

発行日　1988年3月

編集・発行　陸前高田市教育委員会
岩手県陸前高田市高田町字館の沖110
TEL（0192）54-2111

印刷　(有)高田活版
岩手県陸前高田市高田町字馬場前114
TEL（0192）55-2694